

世界から見た沖ノ島  
—祭祀、政治、交易の物語の創造—

サイモン・ケイナー

平成24年

「宗像・沖ノ島と関連遺産群」研究報告Ⅱ-2 抜刷

# 世界から見た沖ノ島

## —祭祀、政治、交易の物語の創造—

サイモン・ケイナー 英国・セインズベリー日本藝術研究所考古・文化遺産学センター長

### 序文

本稿は、沖ノ島の考古学的遺跡と宗像氏に関連する遺跡の価値を、他の宗教や祭祀の場と比較した上で検証する。本稿は、宗教考古学に関する現代的考察、および沖ノ島による当該分野の研究への寄与について考察した筆者(Kaner 2011)の過去の研究から続くものであり、「宗像・沖ノ島と関連遺産群」のユネスコ世界遺産登録への準備過程として委嘱された一連の沖ノ島研究に基づいている。

前稿では沖ノ島に関する物語の背景について論じた。これにより、沖ノ島で行われた祭祀の性質、および、こうした祭祀の背後にある動機についての理解が進むであろう。また、沖ノ島の重要性は、祭祀および宗教的慣習における変化の理解を助ける点にあると論じ、沖ノ島における祭祀の発展についてその背景を簡単に説明した。本稿ではこれを発展させ、「宗像・沖ノ島と関連遺産群」で行われていたことと東アジアとを関連させ、その上で、世界中に存在する聖なる島や聖なる山との比較を行い、既に実施した研究から生じた研究課題も提示した。また、比較対象となる地域にまで研究を拡大し、「自然豊かな場所」として知られる場所を取り上げ、こうした場所と信仰の対象となる壮大な場所との関係を考察する。さらに、沖ノ島にとって非常に重要だと考えられ、「宗像・沖ノ島と関連遺産群」が人類史に幅広く貢献できる一連の研究テーマを追究している。前回の研究では、沖ノ島を考える際に役に立つ三つの作用性(身体的作用性、物の作用性、空間的作用性)を提案して締めくくり、祭祀に関する現代の研究に欠かせない遂行性(原文 performativity)の概念についても論じた。本稿は、沖ノ島への訪問によっ

て宗教的経験に関する考古学がどのように深化するかについていくつか提言を行い締めくくる。そして「海の道むなかた館」におけるすばらしい展示を見れば沖ノ島への旅はもう既に始まっているだろう。

### 比較のための枠組み

ユネスコ世界遺産登録への準備(Fukuoka 2011)として委嘱された比較研究が示すとおり、「宗像・沖ノ島と関連遺産群」は、(1)変化する祭祀の伝統、(2)変化する政治環境と戦略、(3)東アジアにおける交流(外交、貿易、戦争)の関係を理解する上で非常に価値がある。現在、候補となっている資産に含まれる場所には、重要な自然豊かな場所(島、山頂、大きな岩の集積、特定の視界をもたらす海岸線)、記念物(古墳や神社建造物)、奉献物の堆積した遺跡(神々をなだめる目的で行った祭祀の実際の痕跡であるか、少なくともそうした祭祀の前後に行われた行為による堆積を表しているか)に関する研究は進行中)が含まれる。こうした各要素の価値がそれぞれ高い場合、私は、顕著な普遍的価値(OUV)は、これら要素の相互関連性にあると考える。

「宗像・沖ノ島と関連遺産群」が、宗教、交易、国家形成の点から顕著な普遍的価値を持つと考えられる、人類史上の他の物件と異なるのは、まさにこうした関連性である。この地域を世界の他の地域と比較するために、まず、比較のための枠組みを確立する必要がある。この枠組みの基礎は、こうした関連性の重要性についての認識、そして歴史、儀式・宗教、政治、物品の交換に関し織り混ざった物語でなければならず、それぞれは別個の学問による裏付けが必要である。

本稿においては、沖ノ島を世界的な人類史に照らして考察するのに役立つ、数多くの潜在的比較対象とそれらの類型について検討する。同時に、沖ノ島が特に重要であることを認識するために、類似点、相違点ともに検討する。これは、各要素において「宗像・沖ノ島と関連遺産群」の地域に独自性があると論じることにはならない(他の考古学的遺跡が有する独自性以上の独自性があるというように)。むしろ、「宗像・沖ノ島と関連遺産群」に見出される特定の関連性および関係性のおかげで、今日の東アジアを構成する国々が形成される際、東アジア社会が複雑に発展したことを独自の方法で理解できると論じることになるだろう。

世界的状況から見た特異性を強調することは、世界遺産登録活動として委嘱された研究の多くで用いられるミクロ歴史学的手法を補完する(例: Shiraiishi 2011)。現在、日本の考古学は、一世紀を超える詳細な研究に基づく非常に精度が高いデータを提供しており、これにより、正しい編年、さまざまな神話的暗示を織り合わせる基盤、歴史的断片、そして考古学的断片がもたらされている。これらの断片により、東アジア史のこの重要な時期に、玄界灘およびその周辺で起きたことを表現する説得力のある物語を作ることができる。ただし、こうした物語の創作は政治的操作を受けられる可能性があることに留意しなければならない。それは、叙述を命じた側の利益を正当化するために作られた古代の物語と同じである。叙述はそれが書かれた状況から切り離すことはできず、また切り離すべきでない。同時に、物語は自らを反映している必要があり、またそれに関わるさまざまな声に敏感にならなければならない。研究対象となる場所、遺跡、物体は、人と時代によってその意味が変わる。祭祀の伝統における継続性を追跡する場合、神道のように後世におけるさまざまな宗教の組み合わせから生じた宗教について、その源を探ろうとする取り組みを規制するよりは、それらの伝統の動的な歴史を称える必要がある。

「宗像・沖ノ島と関連遺産群」の地域は、宗教考古学の新しい展開を利用しつつ、初期に行われた文化の枠を越える普遍化に関わる問題を排除しながら、複雑な

考古学および3～9世紀の東アジア史に取り組む機会を提供している。Richard Bradleyはその『Archaeology of Natural Places』において、Marcia Eliadeのヒエロファニー、すなわち、文字通り聖なる世界が現れる場所(Bradley 1999: 28-32; Eliade 1954, 1964)の概念を再検討している。「宗像・沖ノ島と関連遺産群」の地域は、このヒエロファニーの優れた例である。

Eliadeによると、宗教はすべて2つの相反する原理に基づく。

「それは、コスモス(秩序)とカオス(混沌)の2つである。コスモスは人類の秩序が及ぶ領域であり、ひいては、聖なる力の及ぶ領域である。一方、カオスはその反対で、神を冒瀆する者にとっての基盤である。この2つの要素は緊張をはらむため、原理または秩序を何度も繰り返し主張する必要がある。祭祀はこの両極端な2つの原理を調停する方法である。ここで重要なのはコミュニケーションであり、聖なる世界が顕現する特別な場所でそれは行われる」(Bradley 1999: 29)

Eliadeはこの特別な場所にヒエロファニーという名を付け、岩の例を用いている。これは沖ノ島の岩に関する私たちの研究に当てはまる。

「その物体は外からの力から身を隠す避難所として現れる。そして、その力は岩をその環境において際立たせ、岩に意味と価値を与える。

この力は物体の中身、またはその外形に宿り、岩自体が神聖なものとして現れる。これはまさに岩がヒエロファニーの中に存在するからである。圧縮できず損なうこともできず、人間とは異なるものである。岩は時間の流れに耐えることができる。」(Eliade 1954: 4)。

Bradley、Eliade、前稿で言及した多くの研究者の影響を受けた上で、比較研究の枠組みは、さまざまな要素が混じった関係、ミクロ歴史学、世界の遺跡とは異なる特異性の認識、類似点・相違点双方の強調、認知の多様性、祭祀の伝統における継続性と変化、そして時間の経過に伴う再生産と変容を重視している。こ

の比較は、単純な形式的類似性(聖なる山、聖なる島)ではなく、構造的テーマ(奉献、巡礼、隔絶)を重視する。このように、「宗像・沖ノ島と関連遺産群」の宗教的経験に関する考古学の構築を、各構成資産およびそれらの関係についての顕著な普遍的価値を理解した上で、またその理解に役立てるように始めることにする。また、そうすることで、玄界灘に関する考古学および歴史学、そして東アジア史における意味が理解できるようになるだろう。

本稿の主張は、「宗像・沖ノ島と関連遺産群」が有する顕著な普遍的価値は、人類史全般にとっての重要な一連のテーマを理解するのに役立つ可能性があるというものである。これらのテーマは世界遺産の登録基準を補完する。具体的には下記のとおりである。

- ・ 宗教と国家形成の関係
- ・ 宗教と国際交流の関係(交易、戦争を含む)
- ・ 時の経過に伴う祭祀の変遷及び、その変遷と様々な宗教的伝統間の相互作用との関係
- ・ 祭祀を行った遺跡の推移、かかる遺跡と自然豊かな場所への崇拜との関係

これらを論証するためには、沖ノ島に対する認識の変化を詳しく検討する必要がある。沖ノ島は、さまざまな祭祀について人々がどのように経験し、考えたかを理解するための基礎となる。それは祭祀によって形成された有形の痕跡がこの島では非常に良く保存されているからである。

### 新しい宗教考古学および宗教的経験の考古学

前稿で述べたように、過去の考古学者は、考古学や過去の遺跡の研究は宗教の理解に役立たないと感じていた。さらに、社会の発展や人間の行動を理解する上で、宗教は重要ではないとも感じていた。人類の発展の理由を理解する上で、宗教は技術、経済、政治ほど重要ではなく、イデオロギーは重要だが宗教はそうでもないと考えられていた。しかし、宗教的信念を告白し教会に通う人は多かった。

日本では、考古学者は1945年以後、『日本書紀』や『古事記』などの歴史的記録を用いての歴史解釈に用心深くなった。戦前、戦中の神道と軍国主義との複雑な関係を経て、こうした歴史的記録は学校で教えられなくなった。その代わり、考古学者は遺跡の解釈にのみ集中するようになった(Fawcett and Habu 1989; Mizoguchi 2007参照)。

しかし、過去25年の間に、大きな変化が起きている。「宗教考古学」という新しい分野が生まれ、多くの本や出版物が世に出ている。もはや宗教は随伴現象と見なされなくなった。原理主義者の信仰のレベルが上昇している世界では、宗教は過去および現在の主要な動機付け因子と認識されている。しかし、私自身の文化的状況下では、信仰を告白する人は減っている。アルプス山脈以北では最も中世の教会の密度が高く、2つの壮大な大聖堂がある私の故郷のノリッチは、信仰について尋ねた最新の市勢調査では、「イングランドで最も神を信じない町」との結果が出ている。日曜に教会に行く人がイングランドで最も少ないのである。しかし日本では、信仰の地が「パワースポット」と認識され、そうした地への訪問が再び関心を集めているため、宗像地域が世界遺産に登録された場合、多くの訪問客を集めるだろう。

私は、沖ノ島という聖なる島に訪問するという大きな恩恵に浴した。訪問前に重要な助言と指導を受けた。沖ノ島は禁忌の島で、見たものを誰にも話してはならず(写真は見せてもよいと解釈した)、何一つ持ち帰ってはならない(これは考古学的遺跡を訪問する際の重要な原則である)。島に行く前に海に入りみそぎを済ませ、自らを清めなければならない。沖ノ島に行くことは巡礼の旅だった。遠く離れた場所に向かい、海を渡るのは非常に困難に思われ、船酔い防止の薬を必要とした。しかし、幸運にも宗像の神々はその日私たちにほほ笑みかけ、海は穏やかだった。沖ノ島に行くこと自体が明らかに通過儀礼であり、信仰にとって重要な部分を成す儀式だったのは疑うまでもない。自宅で特に信仰生活を送っていない人のように、私は畏敬の念に、島のすばらしい自然に、日本列島の非常に特別

な場所に足を踏み入れる特権意識に揺さぶられた。特別な環境のもと日常から切り離されたのである。

私は、女性を含め大多数の人々による沖ノ島への上陸が許されないことをよく承知しており、訪問中、そして訪問後も、宗教的経験の重要性についてその味わいのようなものを一般の人々、つまり沖ノ島に行くことが出来ない人々にどのように伝えたらよいか考えていた。その中で、多くの考古学者に指導を受けた。彼らは、現在、宗教考古学を研究しており、宗教的動機から作られ使われている物質的な文化にどのように関わるかについて考察を続けている。

### 沖ノ島から生まれた多くの物語：東アジア地域、交易、政治、外交を織り合わせた物語

沖ノ島の祭祀遺跡からは8万を超える奉獻品が発掘されている。これには、機能が分かっている品々(鏡、武器、馬具)と「機能」という語を適用するのが難しい品々(示唆に富む石でできた模造品など)が含まれる。宗像地域の関連遺産群で現在行われている調査により、さらに発見が続いており、各遺物から、また発見された場所から物語を生み出すことができる。

「宗像・沖ノ島と関連遺産群」が有する顕著な普遍的価値を評価する際、難しいのは、東アジアにおける宗教的信念と実践の発展史における当該遺産群の意義を理解することである。また、「宗像・沖ノ島と関連遺産群」で発見された供物の考古学的遺物が示す、この地方における祭祀の伝統の変化が、東アジア(日本列島を含む)の政治・経済の発展にどのように関わっているかを幅広く理解する必要がある。

東アジア史における複雑な時代がどのようなものかを詳しく理解している訪問者はほとんどいない。また、手に入る資料が特に厳密な史料批判を受けなければならないのは、その資料が過去において危機と災害をもたらした政治的イデオロギーを正当化するために使われたからである。このため、本稿の最初の部分で採用した主題別アプローチに加え、一般的な訪問者に沖ノ

島との出会いを通じ、沖ノ島研究の独自性という問題への理解を促すため、要素をつなぎ合わせた物語の概要をまとめることは役に立つと思われる。

この物語において、世界史の広範なテーマに結びつく沖ノ島を利用する際、各段階で多くの問題を引き出すよう試みた。また、そういった問題は、沖ノ島を相対的に研究するための基盤を作ることになる。

沖ノ島に関し作られた主な物語は、地域の状況に対応した宗教的信念と実践の発展に関わっている。また、沖ノ島に関する考古学的研究により、私たちは、3世紀から9世紀にかけて盛衰を経験した国・帝国間の交流の重要性を考えるよう促される。以前からの信念と実践に加え、特に仏教という信仰を共有することで東アジアという意識が生まれたのはこの時期である。そして、以前からの信念や実践は、特定の自然豊かな場所に宿る魂や神々に対する慰撫がその土台となっている。

今日、この東アジアという意識は重要である。東アジアは、人口密度は最も高く、経済規模は最大で、ポップカルチャー、ファッション、料理など、疑いもなく21世紀における最大の文化的影響力を有する。もし、沖ノ島がこの意識の理解を促すなら、沖ノ島には顕著な普遍的価値が間違いなくあると言えるだろう。

### 沖ノ島で供物奉獻が行われる前

沖ノ島にある大きな岩に供物が初めて捧げられたときからこの島における祭祀の伝統が始まったのだが、その供物奉獻の前の1000年間は東アジア史にとって非常に重要な時期だった。後の日本史に大きな影響を及ぼす3大宗教(仏教、儒教、道教)の創始者はすべて紀元前500～前200年頃の人であり、偉大な宗教歴史家である。Robert Bellahはこの時期のことを枢軸時代と名付けた(Bellah 2011)。中国は始皇帝により初めて統一され、漢の時代、国力と影響力は大幅に拡大した。宗教家はアジア大陸を幅広く移動し仏陀の言葉を広めたが、仏教が中国に実際に根付くには長い時間がかかった。中国初の仏教寺院が建てられ(193年)、経文

の力が初めて認められそして弾圧を受けた。これは焚書(紀元前213年、始皇帝による)という最古の記録が残っている事件である。日本列島における地域勢力(卑弥呼が統治する邪馬台国など)や朝鮮半島における地域勢力は、新しい中国領や宮廷に使者を送った(238年以後)。沖ノ島で最初の供物が捧げられた頃には、宮廷間で使者を送る慣習は既に確立していた。卑弥呼のような支配者の権威は、シャーマン的な個人の力に支えられていたが、こうした支配者は、鏡のように力と忠誠を表す高級な物質的象徴の重要性を既に認識していた。沖ノ島からこの時期のものである遺物が出土しているが、それらが明らかに儀式的な性格を有することを示す証拠はない。しかし、それらを島に残した漁業が、(魚釣りのような)表面上は世俗的な活動が魂のなだめを必要とするという、アニミズム的な世界の中で存在していたというのは十分にありえることである。

#### 第1期：4世紀後半～5世紀前半(Kaner 2011 : 337-339参照)

中国の中央権力が弱体化した時期、仏教は主要な学問的拠点が現れるとともにその地位を確立し、権力者の支援をめぐって、仏教、道教、儒教の間で競争が起きた。文字表記が中国人により日本に持ち込まれる400年頃まで、仏教は優勢であった。仏教は朝鮮半島の諸国に伝えられた。日本と朝鮮半島の各地方勢力間での交流が盛んになり、390年代、武力衝突が起きた。外交使節の派遣は日本と朝鮮半島、日本と中国の間で続いた。存命中はワカタケルと呼ばれた雄略天皇(456～479年)の統治は、日本における政治と祭祀の性質に重要な進展をもたらした。雄略天皇は、贈答や有利な婚姻によって、ヤマト王権の統治を西日本の大部分にまで広げ、地方の祭儀(宗像地域の祭儀など)に対する保護を確立した。また、日本における突出した祭祀のまとめ役としての役割を確立し、神器を地方の祭儀の場からヤマトの中心部にある石上神宮のような神社に移し保護した。これを進めるため、祭祀を専門の祭祀者に執り行わせ、卑弥呼のように祭祀執行が支配者の特権とならないようにした。また、沖ノ島など地方の主要な神々の神社に供物を捧げ、同時に、中国の宮廷に使者を送る伝統を維持した。しかし、雄略天皇が亡く

なったとき、激しい継承者争いが起き、ヤマト王権は力をまとめきることができず、次世代への継承がうまく進まなかった。

#### 第2期：5世紀後半から7世紀(Kaner2011 : 339-341参照)

中国における建造物は、多くの仏像を含む石窟寺院(雲崗石窟など)や壮大な僧院(9階建てで1000フィートの高さの仏塔があったと言われている永寧寺など)など主要な仏教建造物から始まり、洛陽の新しい都はアジアでもっとも重要な仏教都市になった。朝鮮半島では、新羅が諸国の中で最後に仏教を採用し、すべての国が手の込んだ仏教建造物を作り始めた。日本では、継体天皇(507～531年)が多くの地域をヤマト王権に統一し、農業(および灌漑)そして特に鉄の製造の支配権を得るため、大王の認可を得た儀式化という戦略を用いた。儀式はそれまでは地域の長の領分だったが、それが奪われ、朝廷の祭祀者による大王の領分になった。外交および継承についても儀式化され、大王の支配が及ぶことになった。こうした中央集権化は欽明天皇(535～539年)の治世まで続き、その後日本に仏を崇拜する仏教が伝わった。6世紀後半、推古天皇とその摂政である聖徳太子は、日本土着の祭儀を犠牲にして仏教を推進し、仏教寺院の建設計画が始まった(Kidder 1999および McCallum 2009参照)。推古天皇の時代、権力はさらに大王家に集中した。推古天皇は世界秩序の維持に欠かせない神聖な継承者(天子または天皇)を名乗り、祭祀によるなだめを通じこの秩序の再生産と保証を行った。大型古墳の建設は禁止され、その代わりに寺院の建設が促された。第2期は、唐とヤマトの遠征軍が白村江において戦い、日本の大陸からの撤退により終わりを迎えた。

#### 第3期：7世紀後半から8世紀(Kaner 2011 : 341-343参照)

唐の支配者は、再統一したばかりの帝国を満足できる従属状態にするため、仏教と道教の両方を利用した。666年、6世紀ぶりに漢の栄光を呼び戻すため、高宗は聖なる泰山で封禪の儀式を行った。また、武則天は宇宙の調和を具現化するため仏教も広めた。武則天は

弥勒菩薩の生まれ変わりだと賞賛された。695年、高宗の死後、自ら皇位に就いてから5年後、巡礼者である義浄を出迎えた。義浄はペルシャの船に乗りスマトラとベンガルに向かって出発し、24年間の巡礼で、唐の時代における東アジアでの国際的な雰囲気を得た。武則天は、巨大な釈迦像を収める大塔の前方に、明堂の建設を命じた。その建造物は火事で焼失したが、おそらく武則天の寵愛を失った薛懷義が火を放ったのであろう。この事件の後、武則天は儒教に関心を向けたが、イランから持ち込まれたマニ教など新しい宗教も支援した。

祭祀による権威をさらに高めようとしていた新しいヤマトの支配者である天武天皇(在位672~686年)はこうしたことをよく分かっていた。彼は天皇を頂上に抱く官僚支配による行政国家を作り上げ、新たに編纂を命じた歴史書(712年に初めて登場した)によりその家系による支配を正当化した。それらの歴史書は、現在の支配者が太陽神である天照大神の子孫であるとしている。天照大神は現在、伊勢神宮にまつられ、ここは日本で最も尊貴な神社である。天武天皇にとって、日本における国家形成のプロセスは、710年に奈良にできることになる中国の首都を模した都の構築、745年に建てられることになった東大寺に代表される一連の仏教寺院の建設を準備することで完了した。

#### 第4期：8世紀後半～9世紀(Kaner 2011：343-345参照)

沖ノ島における祭祀が迎えた最後の段階は、新しい宗教の影響が中国にもたらされた唐王朝の後半と同時期である。唐の首都だった長安にネストリウス派教会の石碑があり、781年の中国でのキリスト教の活動が記されている。798年、カリフであるハールーン・アッラシードからの使節団が長安に到着した。偉大な僧侶である空海は日本に戻ってのち真言宗を創設し、支配者層のものだった仏教を一般の人に広めるのに大いに貢献した。また、804年から806年までの中国滞在中、国際的な雰囲気を経験したことだろう。この時期、中国に留学したその他の日本人僧侶には、円仁、常暁、円行などがある(当時の中国に対する日本人の認識に

ついては、Miller 1978およびPollack 2010を参照のこと)。しかし、仏教振興の黄金時代は終わりを迎えてつづつあった。武宗(在位841~846年)の統治時代、僧院は大規模な弾圧を受け、843年から845年にかけて4600カ所の寺院が破壊されたり公共の建物へと変更させられたりし、260,000人の僧侶や尼僧が還俗させられ課税された。さらに、他に40,000の崇拜の場が破壊されるか他の用途に供された。仏教と同様、イランの宗教も法的に禁止され、キリスト教も同じ扱いを受けた。こうした弾圧があった一方、851年、スレイマンというアラブの貿易商が広東を初めて記録に残し、にぎやかで多文化が栄える港の様子を描写している。そこでは200,000人が暮らし、中国人やアラブ人が、イラン人、マレー人、バラモン、チャム族、クメール族、スマトラ島の住民などと交流していた(Gernet1996：294-296)。

スレイマンが広東を描写し、武宗が寺院を破壊する70年以上前、ヤマト朝廷は別のやり方で仏教建造物の力に対処していた。首都を奈良から一時、長岡京に移転した後、平安京(現在の京都)に移したのである。

#### 古代日本史における沖ノ島

3世紀から9世紀の間、沖ノ島という小さい島は祭祀の伝統の中心だった。そこには、島のさまざまな状況を反映した供物と思われる品々があった。供物は、地元で作られた須恵器など比較的日常的な物から、異国風の輸入品(鏡、金銅製龍頭、精巧なミニチュアの織機など)に及んだ。特に輸入品は、奉獻を行った主体や彼らの代わりに奉獻を行った人々に尊重されたと考えられる。そうした品々の中には、沖ノ島に捧げるために特別に作られたものもあれば、もうすでに興味深い経歴を有しているものもあった。

沖ノ島とその関連遺跡がある宗像地域は胸形氏との関係が昔からあり、胸形氏は古代日本の歴史書に記述がある。こうした歴史書などのソースが示しているのは、最初の1000年間において、胸形氏がこの地域における権力を握っていたこと、中央集権が進みつつあ

た新興のヤマト王権との関係は、古代日本における国レベルの地域社会の発展にとって重要だったことである。ヤマトの中心は北東方向に数百キロ離れた畿内にあった。胸形氏に関連する重要な考古学的遺跡には、この地域の古墳や集落が含まれる。

沖ノ島に供物を捧げる伝統は、日本の政治的・経済的・宗教的変化、またその他の文化的変化を背景に進化した。供物が帯びる意味は、時間の経過と共に変化した可能性が高い。3世紀から9世紀の間に沖ノ島に捧げられた供物はそのほとんどが、地元の人々に奉獻されたものと考古学的に解釈されている。これは、朝鮮や中国へ行くのに玄界灘および対馬海峡を安全に航海できるよう祈願するためである。さらに、こうした供物は日本から出航する船乗りやその代理人が捧げたと推測される。こうした航海は、日本、朝鮮半島、中国の間関係において重要な部分を占めていた。航海に出るのは、公式な使節・使者、彼らの随行者、交易者や商人、漁民などで、宗教者、学生、海賊、歌人なども含まれた。また、こうした人々の組み合わせもいろいろあった。航海、そして航海の記録は、紀元一千年紀における日本と大陸との交流を知る手段である。

供物の奉獻が行われている間、日本では宗教の構成に変化が起きた。初期の奉獻が行われていたのは、日本の宗教活動が、体系として文書化されていない土着の信仰に基づいて行われていた時期だった。9世紀頃には仏教寺院が日本でも建設され、経典やその他の文書が一般に出回り、「惟神の道」を成文化した『延喜式』がまとめられた。8世紀には、日本の歴史書である『古事記』と『日本書紀』の編纂が終わっている。この時期には、中国および朝鮮半島の慣習を利用した一般の祭儀の進展と相まって朝廷・天皇の儀式が明確に定められるようになった。

### 沖ノ島と東アジア世界：300～900年

紀元一千年紀の中頃、東アジアとしての意識が新たに高まった。100万年前に初めて人が住み始めてから先史時代には多くの交流と影響があった。一方、現在

の中国、韓国、日本を形成する地域を支配するさまざまな政治的実体間の関わりについて、それを自覚したことを示す証拠は、中国語による洗練された文化がどのように拡散したかでは分かっていなかった。古代の物語は、東アジアの文化について語り、中心地と辺境(通常、中心地にいるのは中国で、他の国家は辺境にいる)に重点を置いているが、最近の研究は付随する関係の多様性に注目している。その関係とは、3世紀初めの漢の滅亡から10世紀初めの唐の滅亡までの間に栄え、滅びた帝国や国家、王国間の関係である。Wang Zhenping は、中国と日本の関係の記録を調査した『Ambassadors from the Islands of Immortals』(2005)で、この時代の「アジアの国際システムの多極性」という視点を掲げた。それぞれ後背地を抱え、存続期間もさまざまだった大拠点の多様性を浮かび上がらせている。

日本では、この時期、自立した地域勢力による競合から、歴史の創造や信仰の構造(釈迦の崇拝や、神道の神々の伝播など)を意識的に操作する権力者による官僚的な中央集権国家へと変化し、ヤマト王権に伝わる歴史の編纂を命じる中でその変化は具体的(『古事記』、『日本書紀』、『続日本紀』)、祭祀が文書化され(『延喜式』)、崇拝のための巨大な建物が建設された(伊勢神宮や東大寺など)。これらはすべて、東アジア大陸の権力との関係、つまり、日本の支配者の姿を明確にするのに役立つ関係を維持し、同時に、その関係を常に見直すという状況下で行われた。そして、こうした関係を持つ性質は、沖ノ島で定期的に行われた祭祀により象徴的に表現され、かつ守られた。

この時期を通して、沖ノ島では祭祀が執り行われていた。沖ノ島と沖ノ島が重要な位置を占める海岸線から内陸部にかけての地域を支配していた胸形氏は、日本初の中央集権国家となったヤマト王権の発展に重要な役割を果たした一大地方勢力だった。沖ノ島は、祭祀遺跡や宗像地域の関連遺産群が良い状態で保存され、さまざまな祭祀の伝統との交流、国家形成の過程における地方勢力と安定しない中央権力の消長と地方勢力との関係の変化、公式使節や宗教的思想、絹のような商品の交流・交易など、すべて新しい東アジアのアイ

デンティティが出現する中で起きた、他では見られないような例を示している。

絹は、比喩としても産品としても、3世紀から10世紀にかけて沖ノ島を取り囲む物語をつなぎ合わせる枠組みとしては適切である。また、絹は沖ノ島で行われた祭祀が示す幅広いテーマを要約する。それらのテーマには世界的な重要性があり、それがあつたために沖ノ島には顕著な普遍的価値があると言える。絹はこの時期、東アジア史に深く関わっており、それが沖ノ島で明らかになっている。これらのテーマは上記に示したものである。当時、日本、朝鮮、中国の関係を構築する交流は、認識(指導者が他国との対比によりどう自己を理解したか)と経験(外国人との出会いや、物事の結果を左右する超自然的な力に影響を及ぼそうとする活動など)によって形作られていた。今日でも外交は認識に左右される。世界を取り巻く問題の多くは、意図に対する誤解や信念に対する見解の相違によるものである。沖ノ島は今後、私たちがこうした誤解を回避する方法を見つけられるよう手を貸してくれるだろうか。

「扶桑」という言葉は、伝説上の「あの世」を表し、古代から中国で言い伝えられてきた。扶桑はおそらく日本ではないが、海を隔てて中国の東にある国だと認識されていた。そして、扶桑の中心には桑の木があるとされ、これは日本の隠喩である絹の源である。ヨーロッパでは、日本は金の島と考えられていた。この金こそが、マルコポーロを東へ向かわせたのである。しかし実際には、絹は長い間、価値を表す単位の一つだった。そして織物のように物語を作るとは、沖ノ島に関する宗教考古学をどのように提示したらよいかを表す良い比喩である。宗像の神々が織物の女神であることもさらに適切さを増す。

Wang Zhenping は、日本が長い間、中国にどのように考えられていたかについて、明確に説明している。

「中国の伝説では、古代の日本は、不思議な力を持つ植物、動物、不死の人がいる島である。ヒ

スイ色の野菜、金色の野菜、桃の木が育ち、青い海から1000メートル以上の桑の木が生えている。その桑の木には、不死の人の食べ物である1インチの果物がある。彼らは金色に輝く身体を持ち、鳥のように飛ぶ。この桑の木々は、まるで抱き合う恋人同士のように同じ根から生え、枝は絡み合っていることが多い。中国人は、こうした鮮やかなイメージがあるので、古代日本の隠喩として「扶桑(絡み合う桑の木)」という言葉を使う。」(Wang 2005: 7)。

宗像に坐す(そして沖ノ島により実際に肉体を持った)神々は織物の神である。Michael Como は、近頃、『Weaving and Binding: immigrant gods and female immortals in ancient Japan』(2009)で、古代日本の宗教と政治の構造において、中国の祭日曆に影響を受けた祭儀の主な役割について論じている。もっともうまく文書化された祭儀には、織り姫と牛飼いに関わる祭儀があるとしている。

「天の皇帝の娘である織り姫は、牛飼いと恋に落ち機織りの仕事を怠ったと言われている。その結果、この恋人たちは一年中、天の川をはさんでそれぞれの岸に分かれるよう申し渡された。ただし、7番目の月の7番目の日には牛飼いは天の川を渡り、一晩だけ恋人と過ごすことを許された。」(Como2009: 38)。

この伝説と付随する祭儀は、捧げ物とお祓いの儀式に関わるさまざまな意味を持つ。牛飼いかからは生け贄の牛が連想され、織り姫は水の神に捧げられた花嫁を連想させる。後に崇拜の対象となる生け贄である。近頃の日本では、こうした信仰は7月7日の七夕祭りとして実践されているが、それは少なくとも天武天皇の時代から文化的意識において重要な役割を果たした。天武天皇は日本における神聖な力を再構築するのに尽力した(Como 2009: 39)。

当時、絹はそれ自体非常に重要で、おそらく、外交使節や交易により交換された最も重要な唯一の産品

だった。また、絹の生産過程にも象徴的な重要性があった。織機や織物工程の要素は、「朝廷や日本の各地にある」祭祀の場や神社に関わりがあった。これには伊勢が含まれる。そこでは、織物に関するものは、「延喜式によると21の神器のうち4つ」を占めていた(Como 2009: 39)。宗像地域はこの点で特に重要である。「おそらく、今日で最大の織機の出土地は、宗像の神々を崇拜する重要な祭儀の場である九州の宗像神社および沖ノ島であろう。沖ノ島は九州と朝鮮半島を行き交う船の重要な停泊地である」。8世紀に書かれた北部九州の地誌である『肥前国風土記』には、「執念深いアカルヒメのなだめ」に関する記述があり、「アカルヒメは女神で、その崇拜を集める独自性は機織りにあるようだ」、「織機が執念深い魂の鎮魂となだめ」のように使われたかを明確に表している」(Como 2009: 40)という。

絹糸は、日本を現れつつあった東アジアの朝貢体制に結びつけた。物々交換は最終的に交易になり、交易はヤマト王権を、インドおよび地中海に至る東南アジアの海上航路により、また、イランおよびイラン以西に至るつながる中央アジアの隊商路により、九州、朝鮮半島、中国沿岸にある新興の貿易港、中国王朝の代々の都、そしてその他の世界へとつないだ。使用された船について十分な考古学的証拠がないが、海事考古学は、使節や貿易商がこの時代に使った船の形についてヒントを与えてくれる。上海やミンダナオ島で発見された、船体が二つあるが、帆を結びつけた丸太船、江蘇省の如皋船のように隔壁がある船、韓国の雁鴨池で発見されたような条板のある平底船などである(Sasaki 2011, Tono 1995)。沖ノ島で祭祀が行われたのは、こうした航行の安全を図るためであり、戻ってくるようになった船は、最終的に奈良の東大寺にある正倉院に宝物類をもたらすことになった。

### 比較対象地

背景をはっきりさせ、何本かの糸を織り合わせて物語ができたので、次に、日本国内および世界から「宗像・沖ノ島と関連遺産群」にとっての適切な比較対象

を探すことにする。世界遺産登録地に挙げられていたり、そうでなかったりするが、さまざまな種類の場所の中から探してみる。種類とは、構造化された堆積の地、都市における宗教的拠点、巡礼地と隔絶した場所(ここでは、聖なる島や聖なる山についてを再考する)や、サーミの聖なる地、古代ギリシャの聖域、聖なる森などの自然豊かな崇拜の対象地、墳墓の地、そして神社(日本の最も有名な歴史ある神社である伊勢神宮と出雲大社についての議論を含む)などである。次に、いろいろな意味で沖ノ島の存在理由である玄界灘を行き交う交換と交流のネットワークについて、これと比較するために、シルクロードおよびヴァイキングの交易ネットワークを取り上げる。

### 構造化された堆積の地

祭祀として、霊魂または神々への供物を地上または地中に捧げるのはよく知られた現象である。多くの場合、そうした物品(金のように高い価値があるか陶器のように日常品であるかに関わらず特別に生み出された物質的文化の産物、または、日常の活動で使われている物に似た物品、さらには動物、動物の一部、人間)は神々への捧げ物である。Insoll は、捧げ物について「殺すこと」に注目した有用な研究を行っている。生け贄として捧げられた物品、動物、人間は、殺害または損壊され、この殺害または損壊の行為は祭祀の重要な部分を成す。その他に堆積については、亡くなった人と一緒に物品を墓に埋葬する行為がある。沖ノ島では、祭祀中に物体を損壊する行為を示す証拠はない。ただし、遺跡に埋まっている物品の調査が進めばこの問題に新しい答えが見つかるかもしれない。

沖ノ島および大島で発見された注目すべき考古学的遺物の多くは、並べ方に計画性があるようであり、船乗りが安全に玄界灘を渡れるよう宗像の神々に捧げた供物の奉獻と解釈される。こうした供物奉獻の祭祀を再構成すると、物品が注意深く並べられているのが分かる。おそらく地面における物品の空間関係、すなわち物品同士や、祭祀への参加者、実際の祭祀行為を執り行う人、崇拜者または立会人との関係に対する配慮がある。長い間、考古学者は「構造化された堆積」とし

て知られた遺跡について研究を続けている。これは、物品それぞれを注意深く関連づけて地上または地中に並べた物質的文化のことである。1950年代と1970年代に行われた発掘調査で沖ノ島から発見された8万個の品々は、現在も進められている研究によるとこうした分析に向いている。有用な比較対象を提供しうる他の重要な例として、イギリスの鉄器時代の何千という穴(特に重要なのはデーンブリーの丘の頂上)から発見された人工物や動物の骨、および古代中国の大きな生け贄用の穴に関する J. D. Hill の分析が挙げられる。特に後者は、中国西南部の雲南省にある太湖近くの三星堆積跡から最近発見された最も壮観な遺跡である(Bailey 2001)。

沖ノ島から発掘された考古学的遺物を最近再分析し判明した重要な特徴は、祭祀の一部を構成する物品の配置、祭祀の前に用意されたか祭祀後片付けられたか捨てられた物品の配置にある(Oda 2011)。さらに疑問がわくのは、これらの物体が2回以上使われたかどうかである。たとえば金銅製龍頭など高い価値があると思われる物が崇拝やなだめの行為に繰り返し使われたかどうかである。歴史的記録が揃っている後世の神道の祭祀において、比較対象物がどのように重要な役割を果たしたのか、将来の調査テーマとして興味がある。

### 都市における宗教拠点

ユネスコの世界遺産登録地の多くは、登録の理由として宗教を挙げている。グラム聖堂、カンタベリー大聖堂、ケルン大聖堂などヨーロッパの大聖堂から、ペルーのカラル・スーペ、ノルテ・チコ文明の聖なる都市(アメリカ大陸の最も古い都市)、コパン遺跡とティカル遺跡(マヤ文明の中心地)、モンテ・アルバン(オアハカ)、チャン・チャン(チム文化の首都)、インカ帝国のクスコ、テオティワカンおよびチチェン・イツァ、メキシコのエル・タヒン、アメリカ大陸最大の聖堂がテノチティトランの古代の中心地の上にそびえるメキシコ・シティなどの中南米の都市の宗教拠点に至るまで、さまざまである。アメリカ大陸の儀礼の中心地には、その他には、カホキアとチャピン、14

世紀から16世紀にさかのぼる岩の彫刻でできた町で、スペイン人による征服以前の文化における儀礼の中心地だったサマイパタの砦などがある。さらに、祭祀のための建造物には、中国の北京にある天壇(北京の皇帝の祭壇)がある。しかし、こうした祭祀のための遺跡や大聖堂は、沖ノ島と関連遺産群とはあまり似ていない。

### 巡礼地および隔離した場所

巡礼地も世界遺産登録地に登場する。バールベック(レバノン)はローマ時代の主要な巡礼地である。オシ市の近くにあるスライマン・トー山(キルギスタン)はムスリムの重要な巡礼地であり、「中央アジアにおける聖なる山の最も完璧な例である」。キリスト教のセンターは、スパインのサンティアゴ・デ・コンポステーラやポーランドのカルヴァリアにある。熊野大社と高野山の仏教徒のセンターなどを含む、紀伊山地の参詣道を形成する場所は、沖ノ島に似ている。『World Archaeology』(1994)の特別号は、巡礼考古学の事例研究を、初期キリスト教時代のアイルランド、メソアメリカ、ペルー、仏教時代のインド、メッカ巡礼について行っている。

沖ノ島への参拝は比較的小規模である。また、意図的に距離をとった、神を冒瀆するような経験に満ちた日常から隔離された信仰の地を沖ノ島と比較するのは、理にかなっている。前稿で聖なる島についての証拠を検証した(Kaner 2011: 345-352)。日本の巖島、太平洋のパパハナウモクアケアやボンベイ島、マルタ島・ゴゾ島・ミロス島などのエーゲ海の島々、リンディスファーン島やランディ島などブリテン諸島の周囲の島々などが含まれる。以下、スケリッグ・マイケル島やアイオナ島、アトス山やセント・マイケルズ・マウントのように海岸近くにある島、ロイ・マタ首長の領地に関わる太平洋のバヌアツの島、ラパ・ヌイ(イースター島)などの紹介を追加する。また同じく、世界の聖なる山とも比較して沖ノ島と論じたが(Kaner 2011: 352-3)、本稿では補遺として、中国の聖なる山々と富士山について論評を加えたい。

島、沿岸地、山など、これら世界遺産地の多くは孤立し遠く離れているように見えるが、実際は通信網が確立され外の世界としっかりつながっていることが多い。Christopher Young は(私信で)「遠く離れていることの評価は非常に主観的である。〔中略〕たとえば、西洋において遠隔地に建つ修道院は、その神聖さがあるがゆえに外の世界と強く結びついている。また、周囲と強い経済的絆を有し、外部との連絡を保てるよう注意深く立地を選んでいるようである…(例：リンディスファーン島などのように、イングランド東岸とのつながりが確保されているアングロサクソンの修道院)。古代の修道院について具体的な証拠を挙げるのが難しいが、西洋の修道院はすべて経済的基盤となる広い地所を持っているのは注目に値する」。

Young によると「重要なのは島かどうかではなく、海に隣接していて、ある程度の遠さや隔絶があることなのである」。Young はこうした修道院の比較表を示した(表1)。私は、島の考古学と海景を考察する際、一見孤立しているが相互につながっているということに注目している(Kaner 2011 : 345-346)。

### 聖なる島と海沿いの修道院

こうした聖地は、アイルランドのスケリッグ・マイケル島やスコットランドのアイオナ島、またギリシャのアトス山のように、島や孤立した海岸に修道院が建っているものである(アクセスに関する問題を沖ノ島と共有する)。

アトス山はエーゲ海を臨むギリシャの北部海岸にある。1000年以上、キリスト教会の正教会派の重要な拠点となっている。険しい岩だらけの土地に現在20の修道院があり1400人の修道士が住んでいる。この山は972年、自治が認められ、歴史書によると1054年から聖地として発展してきた。女性と子どもはアトス山に入ることが許されず、沖ノ島と同じ制約がある。

セント・マイケルズ・マウントは、イングランドのコーンウォール州南西部の海岸にある、干潮の時だけ陸続きになる島である。古代の著述家であるポセイドニオスによって Ictis と名付けられた場所で、錫の交

易港があり、コーンウォールは先史時代後期から有史時代までこの港で有名だったと言える。6世紀頃、修道院が建てられ、950年～1050年頃、大天使ミカエルに献じられた。歴史書には、マウントは陸続きであったが、1099年、海の大増水によりどのように切り離されたか記録されている。修道院はバリンスケリッグス修道院となり、女王エリザベスI世が閉鎖した。セント・マイケルズ・マウントは、英仏海峡をはさんで反対側のモン・サン・ミシェルにある山に比べられることが多い。セント・マイケルズ・マウントによく似た海岸沿いの山で、ブルターニュの北部海岸にあり、単独で世界遺産になっている。

イングランドの北部海岸にさらに2つの聖なる島がある。東岸沖に北海に突き出るようにリンディスファーン島という聖なる島がある。この小さい島は、満ち潮の時に水没する土手道により本土につながる。リンディスファーン島は6世紀からケルト系キリスト教の重要な拠点である。イングランド北東部にキリスト教が広まるのにつれ、聖エイダンや聖カスバートといった多くの重要な聖人と関係があった。リンディスファーン島にある修道院群は、9世紀から10世紀にかけてヴァイキングの攻撃を受け、それを修道士であり歴史家であったベータが書き残している。1550年代、この島に城が建てられた。

スコットランドの北西岸沖にアイオナ島があり、ここはケルト系キリスト教にとってさらに重要な拠点である。アイルランドの修道僧であるコロンバは、故郷での問題から逃れるため563年にアイオナ島にやって来たと考えられている。コロンバと彼に従った12人の修道僧によって建てられた修道院は、イギリスで最も重要な修道僧のネットワークの一つの拠点となり、6世紀後半のスコットランド、また7世紀、ノーザンブリアのアングロサクソン王国に住んでいたピクト人への布教に大いに貢献した。しかし、リンディスファーン島のようにアイオナ島は794年以降、ヴァイキングの攻撃を繰り返し受け、849年には修道院は閉鎖された。ケルズの書として有名な華やかな装飾写本は、アイオナ島で作られた可能性がある(完成したのはケル

ズ修道院)。

聖なる島は北方のキリスト教に限定されたものではない。太平洋に重要な2例がある。最寄りの人間が住む島が1000マイル以上も離れた、世界で最も遠い孤島の一つがイースター島として知られるラパヌイで、1995年世界遺産に登録された。現在はチリ領であるラパヌイは、最初の1000年にポリネシアの船乗りが住み着き、彼らはモアイの巨大な石造彫刻を作った。イースター島はこのモアイ像で有名である。島には、887体のモアイ像が今もまとまって並んでいる。人口は、1700年代の15000人をピークに、1877年には111人にまで減少した。現在は少し回復している。

太平洋のさらに東南には、現在バヌアツ領となっているエファテ島、レレバ島、アルトク島の3つの島がある。およそ3300年前に居住が始まり、現在、ロイ・マタ首長の領地として世界遺産に登録されている。何世紀もの間、主に地域社会が形成されていたが、1452年クワエ火山の噴火により島にあった地域社会は大きな影響を受け、首長の間で長い抗争が始まった。1600年、ロイ・マタ首長は、一連の社会改革を行い抗争に決着がついた。ロイ・マタの住居や墓地は、精神的・道徳的遺産の顕著な例と見なされている。ロイ・マタ首長の領地は、1840年までヨーロッパの影響を受けなかった地域社会における精神的・政治的システムの長期にわたる進化の例である。そしてこれは沖ノ島の状況になぞらえることができる。

### 聖なる山

聖なる山も、前稿で述べたとおり、明らかに沖ノ島と比較すべきものである(Kaner 2011: 352-3)。中国では、一連の聖なる山(峨嵋山、黄山、泰山、五台山、武夷山)がある。Gina Barnesは、仏教徒にとってこれらの山がある場所は聖なる風景であると考えた(Barnes 1999)。

日本で最も高い富士山の聖なる風景を構成する聖地に関しては、神道の神である浅間大神が祀られている富士山は、何世紀もの間、芸術家に与えてきた靈感、

そして、巡礼の対象としての重要性にその顕著な普遍的価値がある。富士山にまつわる物語には、神道と仏教の相互関係、人間と自然の関係、死と再生の象徴性、参拝を目的とした登山と下山に関わる慣習が含まれる。

中国の山にまつわる祭祀、および山による神霊の象徴に関しては、1987年登録の泰山など、中国には既に世界遺産に登録されている山がある。泰山は、3000年以上も崇拝の対象であり、皇帝は折に触れ、封禪という最も重要な国の儀式を行った。

### 崇拝の対象となる自然豊かな場所

Richard Bradleyは『An Archaeology of Natural Places』において、風景の中の特定の場所が持つ重要性や意義を理解する必要性について、説得力を持って論証した。私は前稿で、洞穴、山など特定の形状の風景が有する意義について論じた。ストーンヘンジにおける最近の研究では、この最も有名な先史時代の遺跡に関し、その場所は、地形における特徴的な地質構造線の存在によってある程度決められている可能性に触れられている。

沖ノ島における一連の祭祀を見ると、日本における祭祀は、自然豊かな場所への奉献ではなく記念物(特に記念物的な建物)に重点が置かれた。「宗像・沖ノ島と関連遺産群」の研究により、こうした場所で行われた祭祀の変遷が理解できる可能性がある。

1996年に世界遺産に登録された北スウェーデンにおけるラポニア地域は、サーミ人が伝統的に利用してきた土地の一部にあたる。サーミ人は、北スカンディナヴィアからロシアにかけての土地に住んでいた。沖ノ島との比較で興味を引くのは、特定の配置をした岩および島々の聖地としての扱いであり、こうした場所での祭祀に女性の参加が許されないという事実である(男装した場合は除く)。伝統的なサーミ人の宗教は、特定の魂が宿る特定の場所を崇拝する多神教信仰の形をとっていた。聖地は山、泉、特定の形状の土地などだった。Noaidiと呼ばれるシャーマンはサーミの祭祀において重要な役割を果たし、そのシャーマンの太

鼓はサーミ人の物質的な文化において特別な位置を占める。18世紀から始まったサーミ人によるキリスト教への改宗により、多くの聖地(siejdde)は破壊され、数千個あったシャーマンの太鼓のうち残存する太鼓は100個を下回る。サーミ人の宗教は、ヴァイキングの信仰と類似点がある。

最も有名なサーミの聖地(siejdde)は、北フィンランドの湖に浮かぶウコンサーリ島である。奉獻のためその島の洞穴に捧げられるものは金属品(銀の指輪や青銅の加工品など)などであり、1000年から1350年の間に作られたと考えられる(Bradley 1999: 5)。ウコンサーリ島は、北スカンディナヴィアに存在するおよそ500あるサーミ人の聖地の一つであり、その聖地は、「人間、動物、鳥にどこか似ていることが多い岩の配列」といった特徴ある地形をした場所に関係している(Bradley 1999: 6)。沖ノ島と異なり、サーミ人の聖地における捧げ物は、「サーミ人の毎日の暮らしに深い関係があり〔中略〕安定した食糧の供給を願うもの」であり、サーミ人にとって欠かせないトナカイの群れの健康を願うものだった(Bradley 1999: 9)。

またその他に、自然豊かな聖なる地として重要なのは、古代ギリシャの聖地である(Kaner 2011: 349-350参照)。こうした聖地は人目を引く場所や、有名な山の頂上、泉、洞窟など、ある意味境界と考えられる場所にあることが多い。古代の聖地は、日常的な物や置物といった供物を捧げる場所になることが多かった。また、沖ノ島と異なり、動物の生け贄が祭祀で重要な役割を果たすことが多かった。中央ギリシャのパルナッソス山麓にあるデルポイには、古代ギリシャの最も重要な神託所があった。世界遺産に登録されており、ゼウスが認めたように世界の中心であると信じられている(大地の女神であるオムパロス〈へその意味〉)。デルポイでは、ギリシャ本土にある各聖地、ペロポネソス半島、エーゲ海の島々と同様、アポロが崇拜されていた。アポロ、パン、ヘルメスに関係するヴァリ洞窟、フィリ洞窟などがアッティカにある。これらの洞窟には、大理石でできた奉納銘板が納められている。フィリ洞窟で発見された奉納銘板には、3人の女性を

導く神の使いであるヘルメスが描かれている。その女性たちは、水を連想させると同時に、宗像の神々を思い出させるだろう。キクラデス諸島にある最も重要な島は、南北5キロしかない小さなデロス島で、現在は遺跡が残るだけである。アポロを祀る聖地があるデロス島は1990年に世界遺産に登録され、その遺跡は、新石器時代からミケーネ文明、古代キリスト教時代と約3000年の期間にわたっている。

### 聖なる森

世界遺産に登録された聖地の中で、沖ノ島関連で興味のあるものには聖なる森もある。登録地に共通しているのは聖なる森で、後の世に造られる神社の境内には聖なる森があることが多い。宗像大社の一部である辺津宮の境内にある宗像山には上高宮古墳と下高宮遺跡があり、沖ノ島および御嶽山にある遺跡とあわせ、すべて聖なる森である。

「聖なる森とは、神聖な意味で重要性があると考えられる木々の集まりである。世界中に、特定の神や捧げ物と関連のある森がある。特に近年、急速な都市化を受け、天然資源、植物、動物などの保護活動に関連づけられている森もある。ケルト族、バルト人、ゲルマン民族、近東、ローマカトリック教会、スラブの多神教などの神話的風景と祭儀の特徴とは、聖なる森であり、インド、日本、西アフリカでも聖なる森は用いられた。聖なる森の例としては、ギリシャ・ローマの聖域テメノス、ノルウェーのホルグ、ケルトのネメトンなどがあり、ドルイド教の祭祀と大いに関係があるがそれに限定したものではない。北方十字軍の遠征では、聖なる森に教会を建てる習慣があった」。

有名な例としては(あるいはフィクションかもしれないが)バルト・プルーセンのRomoweまたはRomuvaという多神教の拠点が挙げられ、後世になってリトアニアの理想主義的な民族運動に影響を与えた。1326年、デュイスブルクのペーターは、森と聖堂はバルト人を霊的に支配した「異教徒の法王」の本拠地であると記した。リトアニアのSventybrastis教会では、

4本の聖なる榎の木が、長く使われた多神教の祭祀場にいまなお立っている。スカンディナヴィアでは、ブレーメンのアダムが記したように、ウプサラの神殿に生えている木はすべて神聖だと信じられていた。この神殿は、ノルウェーにある多神教のセンターであった。特にドルイド教に関連したケルト人の多神教の伝統では、聖なる森またはネメトンはケルトの女神であるネメトンに關係していた。また、フランス北西部のブルターニュにある Nevet の森はよく知られている。

ストラボンやヘロドトスのような古代の地理学者や歴史学者には、古代の地中海世界における重要な聖なる森に関する記述がある。ストラボはトルコのガラテヤにあるドルネメトンについて論じている。ここでもケルトの女神であるネメトンに關係しているようである。古代のギリシャやイタリアにおける多くの森は、特定の神に捧げられていて、森の多くは、これらの神をなだめるため人間の生け贄を捧げる場所だと考えられていた。ヘロドトスは、ギリシャ北西部エピルスにあるドドナの聖なる森について、紀元前1000年以上前にさかのぼる、最古のヘレニズムの神託所であろうと考えていた。ドドナは、結局のところゼウスとディオネのゆかりの地となり、重要度ではデルポイに次いで2番目だった。巫女たちは榎の木とブナの木を揺らす風の音を神の言葉として伝えた。

聖なる森はアメリカ大陸、アフリカ、南アジア、東南アジアなど他の地域でも多く見られる。インドでは、およそ14000カ所の聖なる森が分かっているが、実際には10万もの森があったと考えられている。インド南部のカルナタカ州に住むコダヴァ族は1000を超える森を維持していた。聖なる森はそれぞれ、主にヒンズー教の特定の神と結びついているが、イスラム教や仏教の例もいくつか知られている。アフリカにある歴史的に有名なガーナ(ワガドゥ)帝国(9~13世紀)の首都は、サハラ交易から得られる収益で豊かになり、そこには al-gaba という聖なる森があった。そして、Buoyem の聖なる森などいくつかはまだ残っている。

2005年、ナイジェリアのオシュン・オシヨグボの聖

なる森は世界遺産に登録された。オシヨグボ市は、ヨルバ人にとって重要な約400年前につくられた町であり、その町のはずれを流れるオシュン川に沿って広がる75ヘクタールの区域は、ヨルバ人の文化に関わる、唯一残存する聖なる森になっている。この森はヨルバの豊穡の女神であるオシュンと関係があり、今日まで続く祭祀や祭りはここで年中行われる。この森には、40の社、2つの宮殿、5つの聖なる地、9つの礼拝所があり、これらの多くには彫刻や礼拝所がある。ケニアにあるミジケンダ族のカヤの聖なる森は、ムブティ族のピグミーの本拠地であり、Victor Turner の有名な『Forest of Symbols』で取り上げられている。これら2つの森のどちらも、考古学的調査のテーマになったことはない。アフリカの聖なる森に関する Timothy Insoll の研究はその奉獻のあり方について潜在的重要性を示唆しているが、宗像大社に残る下高宮の露天祭祀場の下には、それに劣らないものが期待される。

多くの日本の神社は、「宗像・沖ノ島と関連遺産群」と同様に、その土地特有の森林地帯に囲まれている。そして、その森林自体が聖なる森となっている。土地特有のクバの木(ヤシの一種)とヤブニッケイ(野生の肉桂の一種)が生え、岩石の層がある、沖縄の斎場御嶽の聖なる森は、2003年世界遺産に登録された。

#### 墳墓の地

新原・奴山古墳群には、5~7世紀に造られたさまざまな大きさの41基の古墳があり、玄界灘を臨み大島と沖ノ島に向き合っている。古墳群は、宗像地域と沖ノ島、朝鮮半島を結ぶ航路である海北道中を視覚的に管理していたと考えられる。この古墳群は、統治者である宗像氏の墓であったと考えられる。

墳丘内もしくは墳丘下への埋葬は世界中で広く見られる葬送の形であり、すでに世界遺産に登録されている古墳および古墳群は多い。

東アジアにおける大きな墳丘に埋葬する伝統は、紀元前3世紀の中国の初代皇帝、秦始皇帝の埋葬から始まり、この始皇帝陵は1987年世界遺産に登録された。

権力者の古墳の築造は中国全土、朝鮮半島、日本に広まり、この古墳に由来する古墳時代に築造された古墳は約10万基と推定される。新原・奴山古墳群は、古墳時代の古墳群、また九州の古墳群にとっても最も重要であることは間違いない。さらに印象的なのは、大仙古墳という最も大きい古墳を含む百舌鳥・古市古墳群を抱えた畿内の巨大古墳である。大仙古墳は5世紀の仁徳天王の古墳と考えられていて、長さ486メートルと単独では古代最大の古墳である。現在、百舌鳥・古市古墳群は世界遺産の国内暫定リストに記載されている。日本ではその他に、優雅に装飾された石室を持つ一連の古墳があり、福岡県の竹原古墳、有名な奈良の高松塚古墳などが挙げられる。高松塚古墳は文武天皇陵の可能性がある(Kidder 1999: 191)。こうした装飾古墳、特に熊本県の古墳は日本特有の様式を示しているが、高松塚古墳などは高句麗、中国の唐など明らかに大陸様式の影響が見られる。

最初期の墳墓には、ヨーロッパ新石器時代のロング・バロウ(土塚)やパッセージ・グレイブ(羨道墳)などがある。これら新石器時代の墓は東アジアの古墳とは異なり、コミュニティの住民たちが共有する墓地である。既に世界遺産に登録されている壮観な墓には、アイルランドのブルーナ・ボーニャの遺跡(ボイン渓谷)があり、そこにはニューグレンジ、ノウス、ドウスの巨石墓がある。ニューグレンジの羨道墳は、墓を構成する石に彫刻が施された優れた巨石芸術である。石が冬至の日の出の位置に合うように並べられ、暦の機能もはたしていた。この暦の機能はイングランドのストーンヘンジでも重要である。最近の考古調査によると、ストーンヘンジのヘンジ(環状遺跡)とストーンサークル(環状列石)は死者の世界とも関係がある。世界遺産に登録されたストーンヘンジ周辺には、新石器時代のロング・バロウ10カ所と青銅器時代のラウンド・バロウ(円形の墓)348カ所があり、この地域が1000年以上にわたり墓地に使われていたことを示している。その他重要なヨーロッパの墳墓には、カルナックのガヴリニス島などフランス北西部ブルターニュにある墓などがあり、そこでは他から運んだ装飾のある巨石が墓の築造に再利用されている。有名な墓にサン・ミッ

シエルの墓があり、古代のキリスト教徒はここを専有し墓の上に礼拝堂を建築した。

墳墓は、ユーラシア大陸、アフリカ、アメリカ大陸でも発見されていて、非常に早い時期に始まった長距離交易の証拠が多くの墳墓から見つかっている。たとえば、ケニアのトゥルカナ地方にある Jarigole の墳墓からは、沿岸の産物が見つかっており、これは、東アフリカの遊牧民社会間に広範囲にわたる交易ネットワークがあった証である。また、遊牧民社会により中央アジアにクルガン(墳丘墓)が生まれ、カザフスタンやモンゴルの例が有名である。アメリカ大陸では埋葬と祭祀の両方の理由から墳墓が造られ、それはホープウェル文化の特徴となっている。ホープウェル文化は、アメリカ合衆国の東部と中部の大部分で発達した交易ネットワークそのもので、埋葬品に交易品が含まれている。ホープウェル文化の中心地の一つであるカホキアは、1982年に世界遺産に登録された。セントルイス近くに広がる1600ヘクタールの土地に120基の墳墓があり、その中には、北アメリカ最大の墳墓である高さ30メートルのモンクス・マウンドがある。人口が1万~2万人だったと考えられるこの土地は、1050年~1150年に居住が始まった。小規模だが非常に興味深い墳墓の例は、マニトバにある Devil's Lake - Sourisford 古墳群で、8世紀後半から9世紀前半にかけて造られた。墓から銅製品や貝殻が見つかっており、これは広範囲にわたる交易ネットワークの証拠である。

墳墓の出現は国家形成と交易に関係しており、バーレーンにあるディルムンと Tylos に墳墓が1000基以上ある。これらはユネスコの世界遺産に登録されている。この墳墓からはメソポタミアの陶磁器などが発見されていて、これらが紀元前2250年から前1750年頃、メソポタミアに存在した世界最古の国家レベルの社会と、アラビア南部やインド亜大陸とを結ぶいわゆる「マガン」交易の証拠となっている。他の例としては、英国イングランド東部、ケンブリッジシャーのバートロウ・ヒルズにあるローマ時代の墳墓が挙げられる。これらは、ヨーロッパ北西部で確認された中では最も高い墳墓で、1世紀後半から2世紀前半に築造された。

ブリテン諸島におけるローマ人が支配する拠点の近くにあり、ドイツのラインラントからもたらされた物品が見つまっている。

その他に本稿に関係する墳墓には、紀元一千年紀の後半に造られたヨーロッパ北西部とスカンディナヴィアの墳墓がある。墳墓への埋葬はヨーロッパの先史時代にさかのぼる葬送慣習で、有名なのは、石器時代に造られたドイツ南部のホーホドルフの首長の墓である。古代の国家形成と交易から見て特に重要な墓は、ヴァイキング時代の交易の中心地であるビルカの墳墓と、イエリングの王族の墓地、そしてイングランド東部のサットン・フーにあるアングロサクソンの船葬墓である。

イングランド東部にあるサフォーク州のデベン川を臨むサットン・フーでは、6世紀後半から7世紀前半に造られた20基からなる墳墓群など、数多くの埋葬施設がある。最も有名な墳墓であるマウンド1は、27メートルの長さの船の上に造られ、その船の中にアングロサクソン王国におけるイースト・アングリアの支配者であるレッドウォールド王の墓があると考えられている。同王国は、おそらくレンドルシャム付近に中心があり、海外交易の重要な中心地は7世紀前半からGipeswic(現在のイプスウィッチ)で発展した。サットン・フーの船葬墓は、スウェーデン南部に住んでいたベオウルフにまつわる有名なヴァイキング・サーガにある記述と比較される。ブリテン諸島またはヨーロッパで作られた、その時代で最上の芸術品と考えられる貴重な工芸品には、東ローマ帝国で作られた銀の皿や、非常に有名なかぶとや盾など多くの儀式用の道具が含まれている。現在、元の高さまで復元中のマウンド2でも、青いガラス杯のかけらなど引けを取らない宝物が発見されている。そのため、サットン・フーは、近くにある統治・行政・交易の中心地、海外との交易、原史時代の文献などの関連から、新原・奴山古墳群にとって良い比較対象になるだろう。

デンマークでは、1994年にイエリングが世界遺産に登録された。イエリングは、10世紀に支配者だったハー

ラル1世(青歯王)とゴーム王に関わる王室の中心である。直径約70メートル、高さ11メートルの大墳墓が2基、石でできた大型船の上に造られている。この墳墓は、青銅器時代に存在した墳墓に一部重なるように造られ、古代遺跡とのつながりを求めていたと思われる。北側の墳墓は958年～959年に造られ、ゴーム王の墓と考えられている。この地にある2つのルーン石碑は、ハーラル王とゴーム王についての明確な記述があり、古代スカンディナヴィアにおけるイエス・キリストにも言及している。小さな白い教会が建っている土地は、少なくとも3回、教会の建設があり、最古の建設は965年にハーラル王によって行われた。これが、スカンディナヴィア最古のキリスト教教会である。埋葬物はあまり多く残っていないが、この場所は、北欧の異教徒伝説およびスカンディナヴィアにおけるキリスト教の始まりを理解する上で非常に重要である。この場所は、地元の支配者、文字による古代の歴史的資料、信仰の大きな変遷に関わる点で、新原・奴山古墳群との比較に適している。

関心のある墳墓群で最後に取り上げるのは、フィンランドのボスニア湾を臨むサンマルラハデンマキである。1999年に世界遺産に登録されたこの遺跡には、紀元前1500年～前500年に造られた30を超える花崗岩製の石塚墳がある。フィンランドの海岸に3000を超える青銅器時代の石塚墳群があるのも有名だが、サンマルラハデンマキは比較を行うのに最も良い遺跡である。埋葬品は青銅品などである。しかし、青銅に必要な含有物である銅や錫はこの地方にまったくなく、交易で入手していたと考えられる。祭祀上の目的があったと推測される石塚墳およびそれに付随した構造物は、太陽崇拜にも関係していた。この時代からスカンディナヴィアのほぼ全域に広まった信仰の中心には、この太陽崇拜がある。新原・奴山古墳群にとって重要なのは、サンマルラハデンマキに埋葬された人物が広範囲にわたる交易ネットワークを支配していたであろうという示唆だけでなく、多くの墳墓が互いに視界に入っていたことと海岸を臨む位置に造られている点である。

## 神殿(原文 shrines)

「宗像・沖ノ島と関連遺産群」の推薦理由に一連の神社の存在がある。本稿の目的に即し、神社には建造物が含まれる必要があり、巨岩群、川、山の頂上など、崇拝のための「自然豊かな場所」とは異なるはずである。もちろん、こうした自然豊かな場所に崇拝のための建造物が後から造られるのはよくあることである。

「神殿(ラテン語では *scrinium* 〈本や紙を収納する容器や箱〉、古期フランス語では *escriin* 〈箱またはケース〉)は神聖な、または神を祀る場所である。そこに特定の神、祖先、英雄、殉教者、聖人、守護霊、畏敬や尊敬を集める人物などを祀り、彼らを崇拝する。神殿には偶像、聖遺物など、崇められる人物に関する物が納められることが多い。供物を捧げる神殿を祭壇と呼ぶ。神殿はキリスト教、イスラム教、ヒンズー教、仏教、中国の民族宗教、神道、異教など世界中の宗教施設、また戦没者記念碑など世俗的で非宗教的な施設の多くに存在する。また、教会、寺院、共同墓地などのさまざまな施設、または家庭などにあり、文化によっては移動可能な神殿もある。神殿は祭儀のイメージを投影されることがある」。

沖ノ島の社殿は、8世紀から17世紀中頃までのどこかで沖津宮に造られ、宗像三神の一神である田心姫神が祀られている。これと関連して大島の北側に沖津宮遙拝所があり、これは、沖ノ島に渡らなくても沖津宮の神を拜むことができるよう18世紀の中頃に造られた。三つめの社殿域(中津宮)は、御嶽山山頂での露天祭祀が終了した後、16世紀に大島の南側にある御嶽山のふもとに造られた。社殿は、御嶽山山頂の古代の露天祭祀場の近くにも建てられた。

現在、宗像大社の主要な社殿域は釣川のほとりにあり、境内には辺津宮(社殿の記録は12世紀にさかのぼり、現在は宗像の神、市杵島姫神を祀っている)だけでなく、古代の祭祀場も含まれる。宗像山山頂にある上高宮には13世紀までに神社が建てられ、晴れた日には、ここから大島や沖ノ島が見える。そして宗像山の

中腹に下高宮があり、ここからは沖ノ島と同様、供物として使われたと思われる大量の品々(須恵器や土師器、船をかたどった滑石製形代など)が発見されている。

世界にある神殿との比較は本稿の範囲を越えているが、イングリッシュ・ヘリテージ(English Heritage)による最近の出版物2冊は、神社の建造物と境内に関する有用な比較対象を提示している。

「ブリテン諸島とヨーロッパにおける古代ローマ帝国支配以前の信仰に関する情報はたくさんあるが大部分は間接的で、カエサルのような古典の著者やもっと後世(中世初期)の様々な文献に手短かな言及があるだけである。図像学や芸術史からも貴重な洞察を得られるが、具体的な状況や年代観に欠けることが多い。バリー・カンリフにとって鉄器時代における信仰の複雑なパターンは、現在、「再構築がまったく不可能」であり、文献から分かるのは、自然界は神と靈魂のパンテオンで満たされているように見えることである。そしてその神や靈魂が及ぼす影響は、日常における祭祀行動、または専門家やドルイド教の祭司が執り行う特定の季節的宗教活動における祭祀行動で緩和されている。天の神、母なる女神、豊穡の祭儀、癒やし、戦争などがあり、自然および場所に宿る靈魂に対する確固たる信仰がいたる場所にあった。こうした信仰はなだめの行為となって現れることがあり、こうした行為は、金属細工の供物や人間、動物の遺物という考古学的な足跡を残した。河川、泉、沼地、洞窟、岩、木の茂み(聖なる森は古典作者による言及がある)などの自然風土において行われることが多いが、構造物や囲われた場所で行われることもあった」(English Heritage 2011a)。

イングリッシュ・ヘリテージによると、イングランドにおける先史時代の神殿には主に2つの形式がある。一つは、奉獻に関わる木で作られた道や壇が川や沼地に浮かぶ形式の神殿で、青銅器時代後期や鉄器時代前期(紀元前1500年～前300年)に見られる。もう一つは、

鉄器時代後期(紀元前200年～紀元後43年)に見られる小規模な神殿とその境内である。前者の例として重要なのは、イングランド東部にあるフラッグ・フェンで、長さ1キロの木で作られた道が湾状の水たまりを渡り、広さ2ヘクタールの木製壇と陸地をつないでいる。祭祀用の供物は壊れた青銅の剣などだった。神殿の建物とその境内の重要な例としては、ロンドン西部の現在のヒースロー空港にあるCaesar's Campと、イングランド南部ハンプシャー州にあるヘイリング島である。こうした建造物の大半は、比較的小さく、円形か長方形であり、主たる神殿建築物は直径10メートル未満である。たとえば、セットフォードにあるFisons Wayは、これもイングランド西部にあるが、この神殿のように、小規模な神殿建造物が広い境内(222メートル×165メートル)に建てられている場合もある。こうした神殿建造物の中には、大量の工芸品が地面に並べられ、明らかに供物として使われていたとみられるものがある。たとえば、ヘイリング島では、陶器、金属製のブローチなどのアクセサリ、銭貨、鏡の破片、よろいなどが見つまっている。ローマ帝国時代、そしてその後の時代、ブリテン諸島では神殿が造られ続け、そこには祭壇や特定の神の小像、そして奉献もしくは男根象徴などの魔除けとしての意味をもった品々が置かれた。アングロサクソン時代以後の神殿建造物としては、ヨークシャー州のYeavinger村で発見された神殿がある。

### 伊勢神宮および出雲大社との比較

建築学的研究は、神道の二大中心的存在である伊勢神宮と出雲大社との理解と評価に影響を与える。このことは、広島県宮島の厳島神社にも当てはまる。沖ノ島および宗像大社との比較のため、伊勢神宮の最近の研究および出雲大社との関係の変遷を考察する。今日知られている神社施設の発展要素が、潜在的にはいかに複雑なのかを示し、また、それが沖ノ島と関連遺跡にも同じように当てはまることを示すつもりである。この考察では、屋根の小割板の枚数から建物の土台の高さにおける微妙な差異、建物を囲む塀の数の時代ごとの違いまで、建築の構成要素がこれらの神社ではどのように注意深く操作されているか効果的に示す。こ

うした操作は、見た目でも実質上でも権威の違いを明示したり、アクセスの序列を生み出したりするために行われた(Coaldrake 1996: 22 and 27を特に参照のこと)。同種の戦略は沖ノ島でも用いられている。

現在、伊勢神宮として知られる神社には、内宮および外宮、80を超える補助的な神殿(別宮、摂社、末社)があり、これらは高倉山の北側の山麓のふもとを流れる宮川の下流域に、数多くの小さい丘に見下ろされる位置に建っている(Wada 1995: 63)。Coaldrakeは伊勢神宮を構成する神社は120を超えるのではないかと述べており、内宮および外宮は遅くとも7世紀後半にはこの地にあったことが分かっている。伊勢神宮は20年に一度、場所を交代で変えながら造り替える慣習があることで有名である。このことは804年に初めて記録されたが、この慣習はその前から存在した。伊勢神宮の専門家は、この神社が建てられたのは持統天皇の治世である690年ではないかとしている。一方、神社の宝物として納められ、20年に一度新しくされる特別な形の「宝石をちりばめた刀(玉纏御太刀)」は、6世紀後半に建造された奈良の藤ノ木古墳から発見された刀に似ており、伊勢神宮建立は690年よりも前ではないかと言われている(Wada 1995: 64)。ただし、こうした刀が古代から先祖伝来の家宝として伝わり、その後、伊勢神宮に納められたと考えられなくもない。直近の造り替え(式年遷宮)は2013年に予定されている。

『古事記』によると、垂仁天皇の治世に伊勢で祭祀が行われていたとしており、これは計算すると、紀元前3年頃、つまり弥生時代の中頃になる。この頃、佐賀県の吉野ヶ里は絶頂期を迎えていた(Wada 1995: 75)。和田萃は、さまざまな論争を検討し、現在の伊勢神宮は、宣化天皇が就任して2年目の537年に建てられたと結論づけた。ただしそれ以前は477年だとされていた(Wada 1995: 77-78)。このことは、伊勢神宮が「日本にあるその他の神社」と差別化され、天皇家にとって主となる神社となったため、宗像大社に関しては重要な意味がある。日本では、地元民は共同体としてさまざまな神を崇め、一族はその祖先と守り神を崇拜していた(Wada 1995: 70)。宗像大社は「その

他の神社]の一つであった。

和田は、伊勢神宮の起源は、場所という観点から考えると分かるとしている。つまり、特定の神、特に水と穀物に関わる神に最適だと考えられる風景を有する場所である。これは、先史時代およびギリシャ・ローマ期のヨーロッパの神々についても同じことが言え(Bradley 1999: 25-28)、宗像の神も海と関係があるため沖ノ島にも当てはまる。和田は、水の神性、特に泉および河川の上流に対する崇拜の場として、三重の城之越遺跡および六大遺跡、奈良の阪原遺跡および布留遺跡を挙げている。ここでは祭祀に使われたと考えられる遺物と遺構(掘立柱建物、井戸、水路、陶磁器、有孔円盤、剣形石製品など)が多数発見されている(Wada 1995: 78)。もう一つの穀物(特に米)を司る神については、「川の合流点と川の中州で崇拜されることが多い」。和歌山県の熊野三山および奈良の広瀬大社などが例として挙げられる。和田は、伊勢神宮の外宮は、古い中州に宿るとされる水神への崇拜と関連があり、内宮が祀る神とは異なるとしている。

「伊勢神宮は初め、以下のような流れで発展した。まず6世紀前半、丁巳の年(537年)に伊勢神宮(内宮)が榑田川下流に建てられ、齋宮が天照大神を祀るため送られた。この段階では、まだ常設の神社建物はなく、いつでも祭祀を行えるよう暫定的に建造物が建てられていただけだと考えられる。壬申の乱後、内宮は五十鈴川の上流に移された。一つには最高の神である天照大神を皇族の祖神に定めたかったためと思われる。同時に、榑田川の中流・下流域に住む豪族が崇める神々も付き従う神として内宮に祀られた。また、宮川の中流・下流域で崇められる穀物神・食物神は天照大神への食物の供物に責任を負うことになり、それが外宮建立につながった。持統天皇の代に、定期的に行われる内宮・外宮両方の造り替えが初めて行われた。」(Wada 1995: 83)。

伊勢神宮は、大海人皇子が壬申の乱で甥である大友皇子に勝ち、支配権を得た皇族にとってとりわけ重要

であった。壬申の乱は、大友皇子の父で大海人皇子の兄である天智天皇の死に伴い、672年に起きた皇位継承を巡る内戦である。伝説によれば、持統天皇の時代以来、皇族の祖神とみなされていた天照大神が祀られている伊勢神宮から「神風」が吹き、大海人皇子を勝利に導いたとされる。

伊勢神宮には、以下のような長く複雑な歴史がある。皇室の力が衰えた中世には注目を失い、1460年代から1580年代には、建て替えの慣習が途絶えた。江戸時代末期には、非常に大勢の参拝客が押し寄せ、かつてない注目を集めた(1830年代、わずか1年の間に450万人を超える参拝が記録されている)。そして戦前の国家神道の枠組みの中では最も重要な神社とされた。日本人の美意識を表す典型として変容と再生の象徴となっている。世界遺産が有する顕著な普遍的価値があるとされ、国際的認知が進んでいる。

この長く複雑な歴史は、伊勢神宮が「最も大切にされてきた日本の美的価値(Reynolds 2001: 316)」である、万世一系の皇統の継承を時を越えて体現するもの、また日本建築の原型を提示するものとしようとする試みの陰に隠れることがあった。最近では、Jonathan Reynoldsが論じるように、伊勢神宮の新しい戦後のビジョンは、戦後日本の政治思想の基調となった民主主義のレトリックと共存する形で打ち立てられた。またそれは、現代主義者の美的価値とも調和している(Reynolds 2001: 316)。複雑な歴史を持つ世界遺産であるストーンヘンジによく用いられる言葉を当てはめれば、「どの時代にもその時代にふさわしい伊勢神宮がある」となるだろう。Tze M. Looはその論文「過去からの脱出—伊勢大神宮の再構築(Escaping its past: recasting the Grand Shrine of Ise)」で、この考え方を発展させており、伊勢神宮にまつわる物語を現代風にし、伊勢神宮の世界遺産活動との関わりを慎重に評価している。伊勢神宮の考古学的評価は、他の重要な神社と同様、制限を受けてきたが、最近の研究では、伊勢神宮およびその他神社の建物について、その初期の状況に光が当てられている。しかし、沖ノ島で行われている考古学的調査のように熱心な調査対象となっている神社は

伊勢神宮の他にはなく、沖ノ島がきわめて重要であることの一端がここにかがえる。奈良の三輪山ならびに纏向遺跡および古墳群との比較を行うこともできるだろう (Barnes 2007)。

William Coaldrake による伊勢神宮と出雲大社の比較研究 (Coaldrake 1996 : 16-50) は、「宗像・沖ノ島と関連遺産群」の考察に役に立つ。これは、紀元前500年前後、伊勢神宮と出雲大社の間の覇権を巡る争いが、建築学的にどのように起きたかが分かるからである。Coaldrake は、これら神社の建築物は、「どのように権威の構造もしくはその制度的プロセスの一部になったのかを示す単なる象徴以上の機能を持ち、権威の明確化や法制化、実体化に際しその強力な影響力を発揮している。」と論じている (Coaldrake 1996 : 17)。さらに、Coaldrake は、世界遺産登録に必要な比較研究を示すため、ヨーロッパと日本における記念物としての本質 (原文 monumentality) の違いについて以下の通り述べている。

「〈影響を及ぼし持続する〉記念物としての本質、もしくは建築物がもつ力とは、通例、堅固で見たところ不変な性質を持った、大きくかつ壮観な構造物によって表現される。それこそが、ヨーロッパの大聖堂が持つ時を超えた特質であり、がっしりした石造建築が神の不滅の証明となる。伊勢神宮や出雲大社は〔中略〕日本における権威にとっての記念物としての本質の意味や、それと万物のはかなさという広く浸透した対立概念との関係に光を当てるものである」(Coaldrake 1996 : 17)。

また、Coaldrake は、記念物としての本質の概念化が伊勢神宮と出雲大社で異なっていると述べている。

「出雲大社では、記念物としての本質の追求は一枚の大きな岩からなるモノリス、つまり、巨大さと永続性という観点から行われ、その探求は平安時代における最も野心的な表現に到達した。巨大な柱が集まり、日本の文明上、どの建物にも引けを取らない大きな建造物ができ、その建造物は、

天に届こうとする永遠の野心を表現し、重力に逆らい、時の流れにさえ逆らった。出雲大社では、屋根の材料は定期的な維持管理が必要だが、ヒノキの並外れた耐久性があったため、他の構造的な問題が解決されれば、建造物の木材は1000年もつた。そのため、出雲大社では更新の役割は、永遠を作り出そうとする過度の建築的野心の前でかすんでしまい、結局自らの破滅をもたらした。物質的な大きさと永続性という点から記念物としての本質を追求する試みは、中世ヨーロッパの大聖堂を作った人々の野心と同質である。彼らは同じように、時間的束縛を超越する建築形式を求め、その建物は時として似た運命をたどることがあった」(Coaldrake 1996 : 50-51)。

「伊勢神宮による記念物としての本質に対するアプローチは、出雲大社とは全く異なる。伊勢神宮の建物は、根本的なパラドックスがあるがゆえに、出雲大社より耐久性があると言える。建物は素朴で控えめだが、日本の国家的エートスにおける不変の存在としての永続性を獲得しているのだ。皇室による継続的な支援と、神社に関わる技能と信仰を支える基盤が継承されることでこれが可能になっている。材料に永続性がないながらも控えめに飾り付けた建物は、物質的なはかなさを昇華する過程で、印象的にかつ永続性のある伝統を見出した。出雲大社は、政治的支援が不確実で、またその建築的野心を支える構造的な持続性がなかったため、記念物としての本質において伊勢神宮に及ばず、動的に更新していく方針がモノリス的なものよりも結局は有効であることを認めざるを得なかった。」(Coaldrake 1996 : 51)。

以上のことはどのように「宗像・沖ノ島と関連遺産群」の理解を深めるのだろうか。出雲大社と伊勢神宮が国際関係において果たした役割について詳しくないが、この地域の考古学的研究は増えている (Piggott 1989参照)。こうした研究により、この問題に今後さらに光が当たるだろう。

## 「外国」との接触—国際的ネットワークの考古学

沖ノ島に奉献された供物は、日本を古代東アジアに、ひいては世界につなぐ国際的ネットワークがあったことを意味する。「沖ノ島：海の正倉院」という巡回展覧会が最近日本で開催された(Munakata Taisha 2004)。正倉院とは8世紀に奈良の東大寺内に建てられた皇室の宝物庫である。中国の唐との交易を通じ皇族が得た8000以上の物品が納められており、シルクロードを通して取引された物品の種類の豊富さが分かる。豪華な楽器、絹製の衣服、紙類、地図、螺鈿細工の調度品や物品には、外国人の姿が表現されているものもあり、薬の原料と思われる種子・樹皮・植物なども納められている。正倉院で注意深く保存されたおかげで今日まで残ったこれらの物品により、この時代日本に伝わった壊れやすいものがどのようなものだったか理解できる。こうした正倉院の宝物が沖ノ島に奉献されていたとしても、散失してしまっただろう。

交易と国際関係は、多くの世界遺産でその登録のための価値を証明するために挙げられている。こうした世界遺産とは、キルワ・キシワーニ、ロロペニなどの港、サハラ金交易関連の中心地であるアスキア(マリ)や、サブラタ(リビア)および11世紀から12世紀にかけてのサハラ交易と宗教の中心地であったウァダン・シゲッティ・ティシット・ウァラタのカザール古代都市(モーリタニア)、エッサウイラ(旧名モガドール)のメディナ(モロッコ)などの北アフリカの交易拠点、ノヴゴロド(ロシア)、プロヴァン(フランス)やトルン(現ポーランド)などの中世の交易拠点、コロ(ベネズエラ)およびバルパライソ(チリ)のような中世以後の港、ワイン輸出港であるフランスのボルドー、工業港の英国のリヴァプールなどである。中央アジアでは、古代のシルクロード沿いの一連の交易都市も世界遺産に登録されている。これらの都市には、ウズベキスタンのブハラやイチャン・カラ(ヒヴァ)、タジキスタンのサラズム、トルクメニスタンにあるシルクロード最大の都市の一つと考えられているウルゲンチ(現クフナ・ウルゲンチ)などがある。トルクメニスタンには、沖ノ島で供物が奉献されていた時期に栄えたメルブもある。

交易拠点の中には、シリアのパルミラにあるような並外れた宗教遺跡によって有名な所もある。また、オマーンで登録されたフランキンセンスの地のように、その他の商品の交易も注目される。

しかし、「宗像・沖ノ島と関連遺産群」は、こうした都市化した貿易拠点や中継地とは比較できない。ただ、多くの奉獻品の外来の性格、奉獻品の構成内容が地域的な物からより遠く離れた地からの物へと変化していることこそが沖ノ島の重要性を示している。それは、東アジアの交流史におけるこの重要な時期における、「外国」との接触の展開に伴うものである。

沖ノ島で供物奉献が行われていた時期の国際関係は、さまざまな形の「外国」との接触の上に構築されていた。こうした接触には移住、外交、朝貢、交易、戦争などがある。沖ノ島にはこうした接触を示す直接の証拠はない。さらに西にある太宰府のように中国や朝鮮の船が停泊した証拠はなく、渡来人が島に住み着いた証拠もない。好太王碑に記されているような戦闘や防衛、筑紫平野周辺に築かれたような防衛施設などの証拠もない。沖ノ島に奉献された物品の多くは、元来外交上の贈り物だが、何百キロメートルも東にある朝廷が受け取ってから、沖ノ島の神々に捧げられたものだろう。沖ノ島に関する記録からは、こうした接触を示す直接的な証拠というよりは、接触についての認識や、こうした接触を管理しようとする試み、または、こうした接触やその成果に影響を与えたと考えられていた力(こうした力は超自然的にとらえがちだが、普段生活している世界のありふれた部分として認識されていただろう)をなだめようとする試みを垣間見ることができる。

この時代の日本の歴史における渡来人の役割は、問い続けられるテーマである。紀元前1000年から紀元前1年までの間の、弥生時代の始まりにおける九州北部に稲作と冶金をもたらした移住の性格や規模については、日本の考古学者間で議論が続いている。その後、朝鮮や中国からの渡来人集団が日本に定住した記述が多数あり、須恵器など新しい技術の導入がそれに伴う

ことが多かった。古代の歴史書に登場する神々の多く、特に地理的には日本海側の出雲に関係するスサノオなどは、朝鮮に起源をもつとも言われる (Grayson 2002 参照)。中国および朝鮮から移住したグループは、登場しつつあった朝廷組織の中で重要な役割を帯びていた。Michael Como は、8世紀以後、日本の信仰体系が形成される過程で中国の祭儀が果たした役割について明確に分析している。「大陸の技術や祭儀と密接な関わりをもっていた渡来系氏族は、(奈良・平安時代の基調となった)基本構造と特徴の双方を形成し、それによって官人や支配者は彼らの世界を認識し、表現したのである」(Como 2009 : xvi)。

渡来人集団の性格と規模について議論が続いているように、外国との戦争に関する考古学的証拠も限られている。古代の歴史書は日本の軍隊による朝鮮半島への武力介入を主張しているが、物質的な証拠は見つかっていない。しかし、歴史書はこの種の軍事介入があるかもしれないという脅威の認識については明らかにしている。歴史書には、日本に渡来し定住した外国人の集団に関する記述がある (Verscheur 2006 : 7)。

660年：百済から中国人捕虜100人が渡来し、美濃国に定住

665年：百済からの亡命者400人に近江国への定住許可

666年：百済からの渡来人2000人による東国への居住許可

815年：公式な記録簿によると、「京畿内に1182の氏族が居住し、そのうちの324が朝鮮または中国系の氏族である」(Verscheur 2006 : 7)

紀元一千年紀の大部分、沖ノ島で供物の奉獻が行われていた時期は、日本列島における政治組織体は、朝鮮半島や中国大陸とのネットワーク作りに積極的に取り組んでいた。こうしたネットワーク作りは、神靈への信仰に裏打ちされた祭祀的慣行と不可分のようであり、実際、沖ノ島で行われた供物の奉獻は通常、航海の安全祈願のためと考えられていた。その航海によって国際ネットワークの発展や維持は行われたのである。

シャルロッテ・フォン・ヴェアシュアは、7世紀から16世紀にかけてこのネットワーク作りの性格が変化したと述べている (Verschuer 2006)。日本は、7世紀から9世紀にかけて、中国への朝貢国約70国によるネットワークに属していた。7世紀に日本は中国に10の使節団を送ったが、「反抗的な属国」のような存在だった。

「日本の朝廷は朝貢の作法のうち特定のルールを守っていたが、その他のルールは拒否していた。日本産の品物を貢ぎ物として贈り、交換する形で中国の朝廷から贈り物を得ていた。天子への謁見の間、日本の使節は他の朝貢国の代表に混じって席に着いていたが、日本の君主は中国の朝廷から称号を与えられることはなくなっていた(5世紀後半までは与えられていた)。またその使節団は、他の国と違って朝貢使節の割符が与えられることもなかったようだ。日本の天皇、少なくとも推古天皇は、貢ぎ物に添える手紙に中国の天子に対する忠誠の言葉を記していなかった」(同書 3 - 4)。

古代の日本の歴史書には、こうした使節団について有用な情報が記されている。『日本書紀』には、中国に派遣された30の使節団、そして日本の朝廷を訪れた約100の使節団について記述があり、これは主に朝鮮からの使節団である。日本の歴史書では、朝鮮の使節団を朝貢使節だとしている。朝鮮の正史では記述がないため、使節団の身分および回数を検証するのは難しいが、一方で中国への朝貢については頻りに記述がある。君主国もその返礼として、属国に対し贈り物を携えた使節団を派遣した。たとえば中国の使者が自国に戻る日本の使節に同行する場合もあった」(同書 : 5)。

沖ノ島で供物の奉獻が行われていた時期、日本の交易の相手国は、中国、朝鮮、渤海であった。4世紀から9世紀にかけて、これらの3国はそれ自身かなり変化があった。中国王朝の交代、朝鮮半島における王国間の争いと668年の新羅による統一、渤海による北方進出と遼朝による征服などである。

物品交換を行う関係は、贈り物を支配者に運ぶ公式な外交使節と交易との大きく二つがあり、それらは互いに関係し合っていることが多かった。こうした交換が行われる経済的な状況もまた大きく変化した。東アジアの中に銭貨を鑄造して、貨幣経済を導入する国が生まれたのである。これは物品の価値に影響を与え、それにより、沖ノ島に奉獻された物品の価値に対する理解にも影響を与えた。考察を行ってきた時代においては、絹と布が価値の基準になっていた。

### シルクロード

中国の漢の時代(紀元前206年～紀元後220年)、そしておそらくこれより数千年前から始まっていたであろうユーラシア大陸における交易は、中国人による遠征やより制度的な交通路および交易の確立を経て急速に進んだ。これを証明するのは、紀元前11世紀頃の、古代中国における中央アジア産出のヒスイ、軟玉、ラピスラズリなど非常に高価な石の存在、中国タリム盆地から発見されたコーカサス人のミイラ、古代エジプトで発見された中国絹の存在などである。このネットワークは現在シルクロードとして知られ、全長4000マイル以上、中央アジア、インド亜大陸、アラビア半島、ペルシャ湾を経て、中国(および日本)を地中海およびヨーロッパへとつないだ(Liu 1996, 2010参照)。絹は古代ローマで高い評価を得ていた。中国人は、中央アジアに高い関心を持ち、特に漢と唐の時代、領土を西に拡張した。特に遊牧民族である匈奴との北方の辺境における長い戦いに不可欠であった大宛産の馬を高く評価した。芸術的影響や仏教などの宗教は、絹や金などの物品、そしてあまり歓迎されない腺ベストなどを旅の道連れにして移動した。シルクロード沿いの多くの交易都市が、現在世界遺産に登録されている。陸路が全盛を極めた一方、海上の交易ルートも1世紀から栄えた。中国の港をベトナムやスリランカを経由して東南アジアへとつなぎ、さらにはインドの西岸、紅海にあるローマの中継港まで至り、海路により地中海へ行くことが可能になった。こうした広範囲にわたるネットワークを通じ、沖ノ島、そして宗像氏および畿内の新興のヤマト王権が治める領土は、ラクダの隊商や船によりユーラシアに縦横に張り巡らされた交易と

朝貢のネットワークに引き込まれることになった。

### ヴァイキングの交易ネットワーク

9世紀から10世紀にかけ、スカンディナヴィアのヴァイキングは広範囲にわたる交易と略奪のネットワークを構築し、その範囲は、ヘーゼビュー(デンマーク)、Kaupang(スウェーデン)、ビルカ(フィンランド)などの一大中心地から大西洋を通過してアイスランドおよびグリーンランド(またはヴィンランド)方面、南は地中海を通過して北アフリカおよびビザンチウムまで、東はスタラヤ・ラドガやノヴゴロドのロシアの交易拠点からカスピ海、バグダッド以東にまで広がっていた(www.vikingheritage.org 参照)。しかし、こうした中心地による広い範囲のネットワークにもかかわらず、それぞれの町は大きくなかった。たとえばヘーゼビューの人口はわずか1000人程度だったと推測される。交易の距離は比較的短かったが、ヴァイキングの船は極東から絹や香辛料も運び、ヨーロッパやアラブの商人と交流するアジアからの商人もいた。交易は物々交換の形で行われ、主な交換手段は近東から入手し、後にはイングランドなどからのデーゲルド(退去料)として入手した銀であった。ヴァイキングの交易者は、専門家ではなく主に季節的な航海に参加する農民で、ブリテン諸島の海岸にある孤立した修道院を襲ったヴァイキングのように、その襲撃の被害にあった者たちをおびえさせた。こうした交易ネットワークの豊かさを示す証拠は、上述したデンマークのイエリングやイングランドのサットン・フーといった墓地から見つかっている。交易対象の物品は以下の通りである。

ヴィンランド：木材

グリーンランド：セイウチの牙、毛皮、皮革、羊毛

アイスランド：魚、動物性脂肪、羊毛の布・衣類、硫黄、タカ

イングランド：錫、小麦、蜂蜜、毛織物、銀、大麦、麻

ロシア：奴隷、毛皮、蠟、蜂蜜

ビザンティウム：絹、果物、香辛料、ワイン、宝石、銀、装身具、錦織

フランク王国：武器、装身具、ワイン、ガラス、塩、

羊毛の布

シェトランド諸島：石けん石

ノルウェー：木材、鉄、石けん石、砥石、大麦、ター  
ル

スウェーデン：鉄、毛皮

東バルト地方：琥珀、奴隸、毛皮

### 考察および将来の研究

沖ノ島に関する将来の研究は、前稿で提案した研究課題を含む一連のテーマに沿って、また世界遺産の登録基準に照らし合わせ構築していくのが良いと思う。これらのテーマを研究することによって、訪問者の体験を将来の世界遺産「宗像・沖ノ島と関連遺産群」に合わせて構築することができるだろう。それらのテーマとは、宗教史における沖ノ島の意義、日本で国レベルの社会が確立される過程における権力の創出・維持に宗教が果たした役割、日本(東アジア)の歴史を通じた各時代における沖ノ島と関連遺産群に対する各個人の体験および認識の違い、宗教的伝統および祭祀慣行の経年変化、自然豊かな場所での崇拜から記念物的な場での崇拜(神社などの建物の利用を含む)への変遷の意義などである。

#### テーマ1：宗教と歴史—宗教史における沖ノ島の意義

沖ノ島の意義は、一つには宗教的な重要性にあると考えられている。しかし、宗教の概念が日本史においては問題になる。前稿では「宗像・沖ノ島と関連遺産群」を、神道の源泉に特有なものというよりは、一般的な「宗教と祭祀の考古学」の文脈で考察する限りにおいて(ただし、Kaner 2011: 335-336で説明したように「神道考古学」として知られている分野がある)、宗教の歴史を理解する上で意義があると結論づけた(Kaner 2011参照)。ウェルナー・シュタインハウス(Steinhaus 2012)が論じるプライマリー宗教およびセカンダリー宗教という区別がここでは役に立つ。

「宗像・沖ノ島と関連遺産群」に関し委託された研究のほとんどは、沖ノ島で行われている祭祀の伝統に付随する、歴史に依存した性質に重点を置いてきた。こ

の方法は、大まかな推移と進化的な枠組みという観点から過去の歴史に取り組もうとする、目的論(仏教の伝播、国家や文明の興隆、神道の出現など)に基づく性質をしばしば有する物語りの形式とは大きく異なっている。こうした大まかな歴史は、文献や考古学的な記録が証明する歴史的展開について、しばしばその必然性の程度を示唆するだろう。このような必然性は、多くの古代史料の編纂に関わった人々の好みによく合うものであっただろう。我々は、最初の千年紀の中頃に日本で起きたことやその東アジアとの関係を記述する際、そうしたものに依拠している。

こうした大まかな物語から脱皮するには、沖ノ島のような遺跡の重要性について何を語るができるか、再び焦点をあてる必要がある。シュタインハウスも触れるギアツが述べる「厚い記述」のように、この再焦点化には細部に注意を払う必要がある。何ものも当然視するべきではなく、また可能なら、祭祀慣行の変化を理解するためにはマイクロ歴史学を追求すべきである(Cornell and Fahlander 2007参照)。前稿では宗教的経験に関する考古学的観点から論じ、宗教的経験の多様性を示したが、それは沖ノ島や宗像地域の遺跡が持つ世界遺産たりうる価値を最大限に理解しなければならぬ者にとって大きな課題である。沖ノ島が有する顕著な普遍的価値には、私の考えでは、こうしたマイクロ歴史的なアプローチに対する可能性が含まれると思う。

「宗像・沖ノ島と関連遺産群」における祭祀慣行には大きな変化が起こっている。これは、自然豊かな場所(Bradley1999参照)、すなわち岩陰や露天で行われていた祭祀から、屋内または建物のまわりで行われる祭祀への変化である。沖ノ島の場合、建物とは神社社殿である。

こうしたことすべてに関して、沖ノ島の新しい物語が必要である。ここで、私たちは宗像の神々の助けを受けるのである。彼女達は機織に関わる神であり、機織とは、豊かな比喩を私たちにもたらす動作である。その比喩によってこそ、このすばらしい場所に関する

人を引きつける物語や、人類史における重要性を伝えることができるのである。

## テーマ2：宗教と政治—権力ある国家の創出と維持

沖ノ島で供物の奉獻が行われていた頃の日本列島における政治システムについては、初めのうちは、互いに競い合うこともある自立した各地域が同族関係に基づく変化する同盟関係によってネットワークを形成していた。それが、武力の行使に支えられた、中央集権化した官僚制的で制度化された政治形態へと変化したのである。後者においては、権限のある地位への任命はある程度実力によって、もしくは血縁によらない支配者層との関係によって決まっていた。

こうした変化が起きたプロセスを国家形成(原文 state formation)と呼び、祭祀と信仰はこのプロセスの重要な要素である。沖ノ島やその関連遺跡は、地域的な祭祀の中心が残存した、唯一ではないが非常に珍しいケースであり、二次的な国家形成を理解する上で重要である。

William Coaldrake は、伊勢神宮と出雲大社の関係についての考察を行い、その中で古代日本における権力の性質とその宗教との関係を効果的にまとめている。

「権威は、支配者が神の世界と人間の世界との仲介を行う祭祀から生まれ、効果的な権力は、超自然世界との交流や技術産業の統制、稲作の組織化、あるいは軍事力から生まれた。「政治」を指す言葉として同時代に使われた「まつりごと」とは、神のために祭祀を行うことを意味するが、宗教的な手続上の事柄や日々の行政という意味でも使われた。各氏族の支配者層は地位と称号の序列を作り、事実とフィクションを用いて手の込んだ自らの祖先神話を編み出した。また、彼らの特権を示すための装置として神社を利用した。神社はそうした願望を持つ支配者層による直接的な支援を受け、非宗教的な倉庫や高床式住居の固有の形式が神聖な建築様式に高められ、圧倒的にその支配権を示し、かつ、最も浸透力のある神道のアイコン

となった建物が造られた。彼らにとっては、古代メソポタミアの王と同様、支配とは建築物を造ることで、建築物を造ることは支配することだった」(Coaldrake 1996: 18)。

シュタインハウスのヨーロッパと日本における国家形成の説明により、国家形成に関するヨーロッパの研究との比較が可能になり、また、Michael Como による古代ヤマト王権の評価により、この時代の支配の性質が呈する多様性がさらに強調されている。

「朝廷は統一された独立体ではなく、さまざまな利害や祭祀の伝統、異なった地域や祭祀の中心、神々とのつながりを持った複数の氏族による論議の場だった」(Como 2009: xvi-xvii)。

## テーマ3：宗教と個人—沖ノ島は誰にとって意義があるのか

「宗像・沖ノ島と関連遺産群」への訪問者は皆、帰るとき自らの経験と記憶を持ち帰る。うまくいけば、宗教的慣行と信仰との関係や、沖ノ島で見られるような供物の奉獻の伝統、交易・外交・政治・信仰の間に起きた複雑な相互作用についての理解が、変質するまでとはいかないまでも深まるだろう。こうした理解は、外国にある宗教的重要性をもつ他の地と比較しながら「宗像・沖ノ島と関連遺産群」の意義を経験し、認識することで可能になる。

訪問者の遺跡と関わる感覚を育てることは、彼らの経験を高めるだけでなく、将来に向けてこの貴重な資源の保護を促進する良い方法になる。こうした経験は、他人が沖ノ島から何を得たかを知ることによって深みを増すだろう。沖ノ島の理解を深め、その意義について自らの見解を持った人々には、色々な人々がいたことだろう。彼らは、沖ノ島で何が起きたのかについて自分自身の言葉でどのように理解しただろうか。

沖ノ島の意義について理解促進を行う者にとって立ちだかる壁には、アクセスの問題がある。沖ノ島にまつわる物語の大部分は、アクセスの難しさ、秘密に

包まれていること、そして孤立していることに関係する。沖ノ島と宗像地域のプレゼンテーションにおけるこれからの作業では、この島が、例えば卑弥呼、磐井、聖徳太子、天武天皇などの時代を超えたさまざまな支配者によってどのように認識されていたのかを考察すると、得るものがあるだろう。

#### テーマ4：宗教と場所：聖なる地理観(中心地、外縁、地下、来世)

沖ノ島がもたらす大きな話題の一つに孤立がある。人類史において、自身の精神性を引き出す方法として孤立感を抱こうとした宗教家は多い。

沖ノ島と宗像氏に関わる遺跡のあるその周辺の地域は、特別な場所、または特別な場所が相互に関連したまとまった地だとみなされている。私は、沖ノ島は西日本と朝鮮半島とをつなぎ、かつ隔てる特別な海景の一部であると論じたことがある。それは危険に満ちた海景であった。この海の道は、中国人にとっては「扶桑」という不死の人間が住む島へと至るものであり、日本人にとっては、彼らの故郷やその心地よさから遠ざけたものであった。

将来沖ノ島が世界遺産となった場合、その管理者はこの特性に特に注意を払う必要がある。なぜならその顕著な普遍的価値に大いに貢献するのは、特に沖ノ島が有する特別で、神秘的な性質だからである。ただ、沖ノ島だけが、一般の人の立ち入りが禁止されている場所ではない。自然遺産の基準が適用されている多くの例のほかに、オーストラリアのウルル(エアーズ・ロック)、アトス山、沖縄の聖なる森である斎場御嶽では、すべてアクセスが厳しく制限されている。しかし、沖ノ島や宗像地域については、それに加えて、度々変化する日本や東アジアにおける聖なる地理観の中での存在という点から説明される必要がある。

#### テーマ5：祭祀の変遷、および変遷とさまざまな宗教的伝統間の相互作用との関係

沖ノ島と宗像地域の関連遺跡に関する研究で特に関心のあるテーマは、祭祀の変遷(例えば沖ノ島で立証

されているような)とさまざまな宗教的伝統間の相互作用との関係である(沖ノ島の場合、仏教など流入してきた信仰と、神道となっていく信仰の発展との関係である。Steinhaus 2012は、それをプライマリー宗教とセカンダリー宗教との接触と解釈しており、参考になる)。

#### テーマ6：祭祀の場の発展とその自然豊かな場所との関係

Richard Bradley は彼の著書『An Archaeology of Natural Places』で、ヨーロッパの先史時代に、山、洞窟、泉、川などの不変の自然豊かな場所がなぜ神聖さを帯びるようになるのか示唆に富む研究成果を発表した。この研究は、記念物の出現とその発展(例えば大型の埋葬施設、ストーン・サークル、ヘンジ、溝で囲まれた村落など)に関する2つの研究『The Significance of Monuments』と『Altering the Earth』に続くものである。またBradleyは、祭祀や奉獻について広範囲に触れている。奉獻には兵器が多いが、ヨーロッパの青銅器時代の大部分では、人間の生け贄が含まれることもある。Bradleyは研究をヨーロッパに限定しているが、この研究は他の地域にとって興味深いものになるかもしれないと述べている(Bradley2000 : xii)。彼が例として挙げる神聖な重要性を帯びている自然豊かな場所とは、フィンランドのウコンサーリ島やノルウェーのアルタといったサーミの聖地(siejdde)で、生け贄を捧げる場所から、デルポイやプシクロ洞窟、Juktas山の頂上の聖域などの古代ギリシャの遺跡、スウェーデンのブーヒュースレーン地方など先史時代スカンディナヴィアの有名な岩絵の遺跡まで、多岐にわたる。

Bradleyは変わることはないサーミの聖地について以下のように述べている。

「選ばれた場所の物理的特徴を詳述し、また、そこで起きる数多くのプロセスを明らかにすることは可能である。こうした場所は、自然の地形が独特で、周囲の土地よりも目立つ特徴があり、石化された人々や動物を生き返らせた場所もあるが、

それらはサーミのコスモロジーの中での意味ゆえに重要であると言える。広い大地から選ばれた岩やその他の特徴には、特別な力があると信じられ、超自然世界との接触ができた。こうした接触は、サーミ人の日常生活にすっかり溶け込んでいた生け贄を捧げることによって行われていた。同時に、こうした場所は三つの異なった世界を含む複合的なコスモロジーの構造を示す、目に見える標識に過ぎず、それらの世界には洞窟や山などの自然豊かな場所から接触した。](Bradley 2000 : 13)。

沖ノ島における祭祀は建物も記念物もなく屋外で始まったため、後には続いて神社社殿が建てられるが、サーミの聖地と沖ノ島とを比較するのは適切である。沖ノ島での供物の奉獻が行われていた時期の祭祀については多くが明らかになっているため、私たちは、当時のコスモロジーにおける沖ノ島や関連する古墳などの遺跡の位置について述べることができる。考古学的な証拠と後世の文献の思慮深く批判的な読解から可能な推測との組み合わせが可能な沖ノ島は、「不変の場所」での崇拝から記念物的建築物の中での崇拝へという、宗教的中心地の発展についての物語を生み出すことができる場所として、世界中の遺跡の簡潔な一覧表に載る存在である。

「宗像・沖ノ島と関連遺産群」は、祭祀の場の発展とその自然豊かな場所との関係について研究できる貴重な機会を提供する。日本の主要な祭祀の中心地の多くは、際だった特徴のある景観の中に存在するが、今日までの研究の主眼はそこに造られていった建物の様式に置かれてきた。しかし、Coaldrake が指摘するように、私たちは、聖なる区域から建物内へという、伊勢神宮や出雲大社における崇拝の発展を既に把握している (Coaldrake 1996 : 19)。この変化は、共同社会の祭祀活動の中心が巨大な墳墓の築造から寺院や神社の建築へと移行したことに並行して生じたものである。

## 結論

本稿では、「宗像・沖ノ島と関連遺産群」の顕著な価

値は、4世紀から9世紀にかけての東アジアにおける宗教や政治、国際関係の発展をすべて織り交ぜた関係性の中にあると指摘した。この時期は、東アジアとしての意識が初めて生まれた時代である。

私は、「宗像・沖ノ島と関連遺産群」と比較できる一連の遺跡やネットワークの提案を行った。具体的には、サーミ人にとっての自然豊かな聖なる場所、古代ギリシャの聖域、聖なる森や神殿、一連の聖なる島や聖なる山、そして墳墓群などである。これらのうちどれも、当時の人々、沖ノ島や大島で供物を奉獻し、また宗像地域の古墳群に埋葬された人々(少なくともその一部)の暮らしに重要な役割を果たした、宗教的経験についての認識と理解を促す上で有用である。

「宗像・沖ノ島と関連遺産群」で行われた祭祀の伝統を示す考古学的な痕跡に対してマイクロ歴史的な分析を行い、こうした宗教的経験を理解することによって、沖ノ島や大島などの宗像大社などの神社で今も行われている祭祀慣行を理解するための、基本的な背景を知ることができる。沖ノ島や宗像地域で行われている祭祀の長い伝統は、おそらく実践や意義についての重要な多様性を内包している。行われた祭祀の意味は、長い時代の変化によって、そして人々によって変わるだろう。雄略天皇などのヤマト王権の支配者のために奉獻された供物の意味は、天武天皇または聖武天皇の時代の供物とは異なっていたのである。

私は、世界遺産推薦のための候補選定の背景にある実際的な理由をよく理解している。その一方で、「宗像・沖ノ島と関連遺産群」の顕著な普遍的価値を理解する上では、東アジアの状況を理解することが重要で、訪問者に対しては、福岡の太宰府や鴻臚館のような近隣の遺跡や、また朝鮮半島の竹幕洞祭祀遺跡(Woo 2011)やその他の祭祀遺跡(Ko 2011)のような類似の遺跡によるそうした状況の説明をする必要がある。

最後に、歴史資料を使うことができるため、少なくとも日本から大陸に、そしておそらくはその反対にも、使節が派遣されていた期間の状況を描くことも可能で

ある。それこそが、大変多くの供物が沖ノ島に奉獻された理由である。J. Edward Kidder は、朝鮮および中国との交流の性格について鋭くまとめており (Kidder 1999 : 82 and 110-111)、中央のヤマトの人々に、筑紫や海外に派遣されたがった者がいかに少なかったかということ述べている。8世紀の詩集である『万葉集』には、736年、聖武天皇の治世にヤマトから派遣された外交使節について部分的に記述した詩がある。奈良での快適で安心感のある暮らしから離れなければならない関係者にとって、そうした旅が精神的苦痛を伴っているのは間違いない。こうした説明や、利用する船の詳細 (Borgen 1982) により、関係者の経験がより深く理解できるようになる。私たちが信仰とみなすものを通じて彼らはその経験を理解しようとしたし、また彼らは祭祀を通じてその経験を制御しようとしたのである。

## 謝辞

「宗像・沖ノ島と関連遺産群」の世界遺産登録に向けての準備に携わる関係者 (特に、寛容で、現地に案内し、私の不十分な意見に耳を傾けてくれた宗像市、福津市、福岡県の関係者)、幸運にも国際専門家会議で出会うことのできたさまざまな専門家、そしてアイデアを共有してくれた沖ノ島の研究者やファンなど多くの方々に感謝を表したい。事実・解釈・判断に関する誤りについてはすべて私の責任である。

## 参考文献

本稿は、ユネスコ世界遺産に関するネット上の記述、ならびに、ウィキペディアの記述および関連サイトに頼るところが大きく、可能な限り公式の出版物により確認を行った。「nd」の印の付いた記載は、「宗像・沖ノ島と関連遺産群」の英語版研究報告書に含まれる論文である (2011 and 2012)。以下に、2011年の論文で引用した出版物に加え、2つの論文での考察に参照した出版物を記す。

Bagley, Robert (ed.) 2001. *Ancient Sichuan. Treasures from a Lost Civilisation*. Seattle Art Museum and Princeton University Press.  
 Barnes, G.L. (ed.) 1995 (a). Buddhist archaeology. *World Archaeology* 27.2 (whole issue).

—————1995(b). An introduction to Buddhist archaeology. In Barnes (ed.) 165-182.  
 —————1999. Buddhist landscapes of East Asia. In Ashmore, W. and Knapp, A.B.(eds.) *Archaeologies of landscape: contemporary perspectives*. Oxford, Blackwell: 101-123.  
 —————2007. *State formation in Japan: emergence of a 4<sup>th</sup>-century ruling elite*. London, Routledge.  
 Bellah, Robert N. 2011. *Religion in human evolution: from the Palaeolithic to the axial age*. Harvard, Belknap.  
 Best, Jonathan W. 1982. Diplomatic and cultural contacts between Paekche and China. *Harvard Journal of Asiatic Studies* 42. 2: 443-501.  
 —————1990. Horserider reruns: two recent studies of early Korean-Japanese relations. *Journal of Japanese Studies* 16. 2: 437-42.  
 —————2002. Buddhism and polity in early sixth-century Paekche. *Korean Studies* 26. 2: 165-215.  
 —————2006. *A history of the early Korean kingdom of Paekche, together with an annotated translation of The Paekche Annals of the Samguk Sagi*. Cambridge, Harvard University Asia Center.  
 Bialock, David T. 2007. *Eccentric spaces, hidden histories: narrative, ritual and royal authority from The Chronicles of Japan to The Tale of the Heike*. Stanford, Stanford University Press.  
 Borgen, Robert 1982. The Japanese mission to China of 801-806. *Monumenta Nipponica* 37. 1: 1-28.  
 Bradley, R. 1999. *The archaeology of natural places*. London, Routledge.  
 Clack, Timothy 2011. Syncretism and religious fusion. In Insoll (ed.): 226-242.  
 Coaldrake, William H. 1996. *Architecture and authority in Japan*. Nissan Institute and Routledge, London and New York.  
 Como, Michael 2000. Silla immigrants and the early Shōtoku cult: ritual and the poetics of power in early Yamato. PhD dissertation, Stanford University.  
 —————2008. *Shotoku: ethnicity, ritual and violence in the Japanese Buddhist tradition*. Oxford, University Press.  
 —————2009. *Weaving and binding: immigrant gods and female immortals in ancient Japan*. Honolulu, University of Hawaii Press.  
 Coningham, Robin 2011. Buddhism. In Insoll (ed.): 934-947.  
 Cornell, Per and Fahlander Fredrik 2007 (eds.) *Encounters, materialities, confrontations: archaeologies of social space and interaction*. Newcastle, Cambridge Scholars Press.  
 Ebrey, Patricia Buckley 2010 (2<sup>nd</sup> edition). *Cambridge illustrated history of China*. Cambridge, University Press.  
 Elverskog, Johan 2010. *Buddhism and Islam on the Silk*

- Road*. Philadelphia, University of Pennsylvania Press.
- English Heritage 2011 a. *Later prehistoric shrines and ritual structures*. London, English Heritage.
- 2011 b. *Shrines: Roman and Post-Roman*. London, English Heritage.
- Gernet, Jacques 1996 (2<sup>nd</sup> edition). *A history of Chinese civilization*. Cambridge, University Press.
- Grayson, James H. 2002. Susa-no-o: a culture hero from Korea. *Japan Forum* 14. 3: 465-488.
- Fawcett, C. and Habu, J. 1989. Education and archaeology in Japan. In Stone, P. and MacKenzie (eds.) *The Excluded Past: Archaeology and Education*. London, Unwin Hyman: 217-230.
- Foltz, R. 2010. *Religions of the Silk Road: premodern patterns of globalization*. London, Palgrave Macmillan.
- Hatada Takashi 1979. An interpretation of the King Kwanggaet'o inscription. *Korean Studies* 3. 9: 1-17.
- Hirano Kunio 1977. The Yamato state and Korea in the fourth and fifth centuries. *Acta Asiatica* 31: 51-82.
- Hong Wongtak 1994. *Paekche of Korea and the origin of Yamato Japan*. Seoul, Kudara International.
- Holcombe, Charles 1999. Trade-Buddhism: maritime trade, immigration and the Buddhist landfall in early Japan. *Journal of the American Oriental Society* 119. 2: 280-292.
- Hori Ichiro 1966. Mountains and their importance for the idea of the afterworld in Japanese folk religion. *History of Religion* 6: 1-23.
- Insoll, Timothy (ed.) 2011. *The Oxford handbook of the archaeology of ritual and religion*. Oxford, University Press.
- 2011 b. Sacrifice. In Insoll (ed.) 151-165.
- Hamilakis, Yannis 2011. Syncretism and religious fusion. In Insoll (ed.) 226-242.
- Hayashi Ryoichi 1975. *The Silk Road and the Shosoin*. New York, Weatherhill.
- Kamei Kiichiro nd. The Munakata clan and the Munakata faith in ancient Japan.
- Kaner, Simon 2011. The archaeology of religion and ritual in the prehistoric Japanese archipelago. In Insoll (ed.): 457-469.
- nd. A re-examination of the Okinoshima ritual site from the viewpoint of ritual archaeology.
- Kase Naoya nd. Formation processes of the ancient kami rituals system and the Munakata shrine.
- Kawakubo Natsuko nd. Archival document collections in Munakata Grand Shrine and medieval and modern history of Munakata Grand Shrine.
- Kidder, Edward 1999. *The Lucky Seventh: Early Horyu-ji and its time*. Tokyo, International Christian University.
- Kim, Hyun-Koo 1989. A study of Korea-Japan relations in ancient times: centering on the Taika reforms and formation of cooperation among Shilla, Japan and Tang China. *Korea Journal* 29. 10: 18-27.
- Ko Kyoungsoo nd. Ritual archaeological sites and relics related to divine rituals in Korea. Materials for comparison for positioning Okinoshima divine rituals.
- Konishi Takamitsu 2000. Constructing imperial mythology: Kojiki and Nihon shoki. In Shirane and Suzuki (eds.) 51-67
- Lagerwey, John 2010. *China: a religious state*. Hong Kong, University Press.
- Liu Xinru 1996. *Silk and religion: an exploration of material life and the thought of people, AD 600-1200*. Oxford, Oxford University Press.
- 2010. *Silk Road in world history*. Oxford University Press.
- Loo, Tze M. 2010. Escaping its past: recasting the Grand Shrine of Ise. *Inter-Asia Cultural Studies* 11. 3: 375-392.
- Mace, Francois 1986. *Le mort et les funeraillles dans le Japon ancien*. Paris, La Societe Franco-Japonaise de Paris.
- McCallum, D.F. 2009. The four great temples: Buddhist archaeology, architecture and icons of 7<sup>th</sup> century Japan. Honolulu, Hawaii University Press.
- Miller, Richard J. 1978. *Japan's first bureaucracy: a study of eighth-century government*. Ithaca, Cornell University.
- Mori Hiroko nd. Intangible folk cultural assets of Munakata Grand Shrine.
- Munakata Taisha 2004. *Umi no Shosoin: Okinoshima*.
- Nickel, Lukas 2002. *The return of the Buddha: the Qingzhou discoveries*. London, Royal Academy.
- 2011. The prehistory of religion in China. In Insoll (ed.): 442-456.
- Oda Fujio nd. Re-examination of the Okinoshima ritual sites: their relation in the 4<sup>th</sup>/5<sup>th</sup> century to the Munakata region.
- Ooms, Herman 2009. *Imperial politics and symbolics in ancient Japan: the Tenmu dynasty, 650-800*. Honolulu, University of Hawaii Press.
- Pearson, Richard 1992. *Ancient Japan*. Washington DC, Sackler Galleries.
- Piggott, Joan R. 1989. Sacral kingship and confederacy in early Izumo. *Monumenta Nipponica* 44. 1: 45-74.
- 1997. *The emergence of Japanese kingship*. Stanford, University Press.
- Pollack, David. *The fracture of meaning: Japan's synthesis of China from the eighth through the eighteenth centuries*. Princeton, Princeton University Press.
- Pratt, Keith. 2007. *Everlasting Flower: a history of Korea*. London, Reaktion Books.
- Reynolds, Jonathan M. 2001. Ise Shrine and a modernist construction of Japanese tradition. *The Art Bulletin* 83: 316-341.
- Roberts, J.A.G. 1996. *A history of China. Volume 1: Prehistory to c.1800*. Stroud, Alan Sutton Publishing Ltd.
- Sasou Mamoru nd. The composition of relics and the structure of rituals on Okinoshima island: with a focus on iron

- products and metal replicas.
- Schafer, Edward H. 1989. Fusang and beyond: the haunted seas to Japan. *Journal of the American Oriental Society* 109. 3: 379-99.
- Schottenhammer, Angela (ed.) 2001. *The emporium of the world: maritime Quanzhou, 1000-1400*. Leiden, Brill.
- (ed.) 2005. *Trade and transfer across the East Asian Mediterranean*. Wiesbaden, Harrassowitz.
- Sheridan, Michael J. and Celia Nyamweru (eds.) 2007. *African sacred groves: ecological dynamics and social change*. University of Ohio Press.
- Shigefuji Teruyuki nd. International exchange of Kofun period chieftains of Munakata region and Okinoshima rituals.
- Shinohara Yuichi nd. Stone ritual items and the stones of the Okinoshima island in the fifth century.
- Shiraishi Taichiro nd. The Yamato power and rituals on Okinoshima island.
- Stark, Soren, Karen Rubinson, Zainolla Samashev and Jennifer Chi 2012. *Nomads and networks: the ancient art and culture of Kazakhstan*. New York, Institute for the Study of the Ancient World.
- Steinhaus, Werner nd. Okinoshima and state formation.
- Sugiyama Shigetsugu nd. Glass bowl unearthed from Okinoshima island.
- nd. Okinoshima ritual in the history of Shinto.
- Takasue Junichi nd. Prehistory of Okinoshima rituals.
- Tono Haruyuki 1995. Japanese embassies to T'ang China and their ships. *Acta Asiatica* 69: 39-62.
- Turnhout, Belgium 2008. *Art, architecture and religion along the Silk Roads*. Brepols.
- Verscheur, Charlotte von 1999. Japan's foreign relations 600-1200: a translation of *zenrin kokuhoki*. *Monumenta Nipponica* 54. 1: 1-39.
- 2000. Looking from within and without: ancient and medieval external relations. *Monumenta Nipponica* 55. 4: 537-566.
- 2005. Across the perilous sea: Japanese trade with China and Korea from the seventh to the sixteenth centuries. New York, Cornell University.
- Wada Atsumu 1995. The origins of Ise shrine. *Acta Asiatica*: 69: 63-83.
- Wang Zhenping 2005. *Ambassadors from the islands of immortals: China-Japan relations in the Han-Tang period*. Honolulu, Hawaii University Press.
- Whitfield, S. 2004. *Aurel Stein on the Silk Road*. London, British Museum Press.
- Woo Jae Pyoung nd. Chungmakdong ritual site and Okinoshima ritual site.
- Woodward, Anne 1992. *Shrines and sacrifice*. London, English Heritage.
- Yamano Yoshiro nd. Establishment of *shaden* in Japan and Munakata Shrine.
- Yanagida Yasuo nd. The bronze spearheads unearthed from Okinoshima island and the bronze-ware items used for rituals.
- Yu Byeongha nd. Navigation and rituals on the Korean peninsula: mainly in ancient times.

(表1)

遺跡名	遠隔地 にある	祭祀もしくは 宗教上の用途		通交・ 交易	監禁の 場	コメント
<b>A. 島嶼</b>						
<b>A I. 世界遺産</b>						
		孤立	対外的			
チロエの教会群			X			イエズス会伝道施設
チンクエ・テッレの小島群 (ポルトヴェーネレ沖合)		X				
エレファンタ石窟群		X				
エリス島(自由の女神像)				X	X	移民
ゴレ島				X	X	奴隷売買
琉球王国のグスク			X			拝所、聖なる森
巖島神社			X			おそらく最も類似したものだが、神社 建造以前の証拠はあるか。
モン・サン・ミシエル		X			X	ベネディクト会士修道院
沖ノ島	X		X	X		
ロベン島					X	
スカン・グアイ(アンソニー島)			X			土着的、祭祀
スケリッグ・マイケル		X				ケルト人の修道院
ソロヴェツキー諸島		X			X	正教会の修道院、帝政ロシア・ソビエ ト連邦時の監獄 紀元前3000年紀からの聖地
<b>A II. 沿岸</b>						
アトス山		X				正教会の修道院
<b>B. 非世界遺産</b>						
<b>B I. 島嶼</b>						
アングルシー島			X			ドルイド僧が支配したとされるが、具 体的な証拠はない
ファーン諸島		X				ケルト人の修道院
グロッセ島、ケベック州				X	X	移民施設
アイオナ島		X	X	X		ケルト人の修道院、伝道団のセンター
レランス諸島		X				6世紀から修道士のセンター
リンディスファーン島		X	X			ケルト人の修道院、伝道団のセンター
マジュリ中州			X			ブラフマプトラ川の中州に建つ聖堂
ノワールムティエ島		X				古代からの修道士のセンター
<b>B 2. 沿岸</b>						
ウェアマスとジャーロウ、ハート ルプール、ウィットビー、バラ城、 ブラッドウェル、リカルバー		X	X			沿岸部にあるアングロサクソン人の修 道院